国分寺市文化財調査報告　第43集

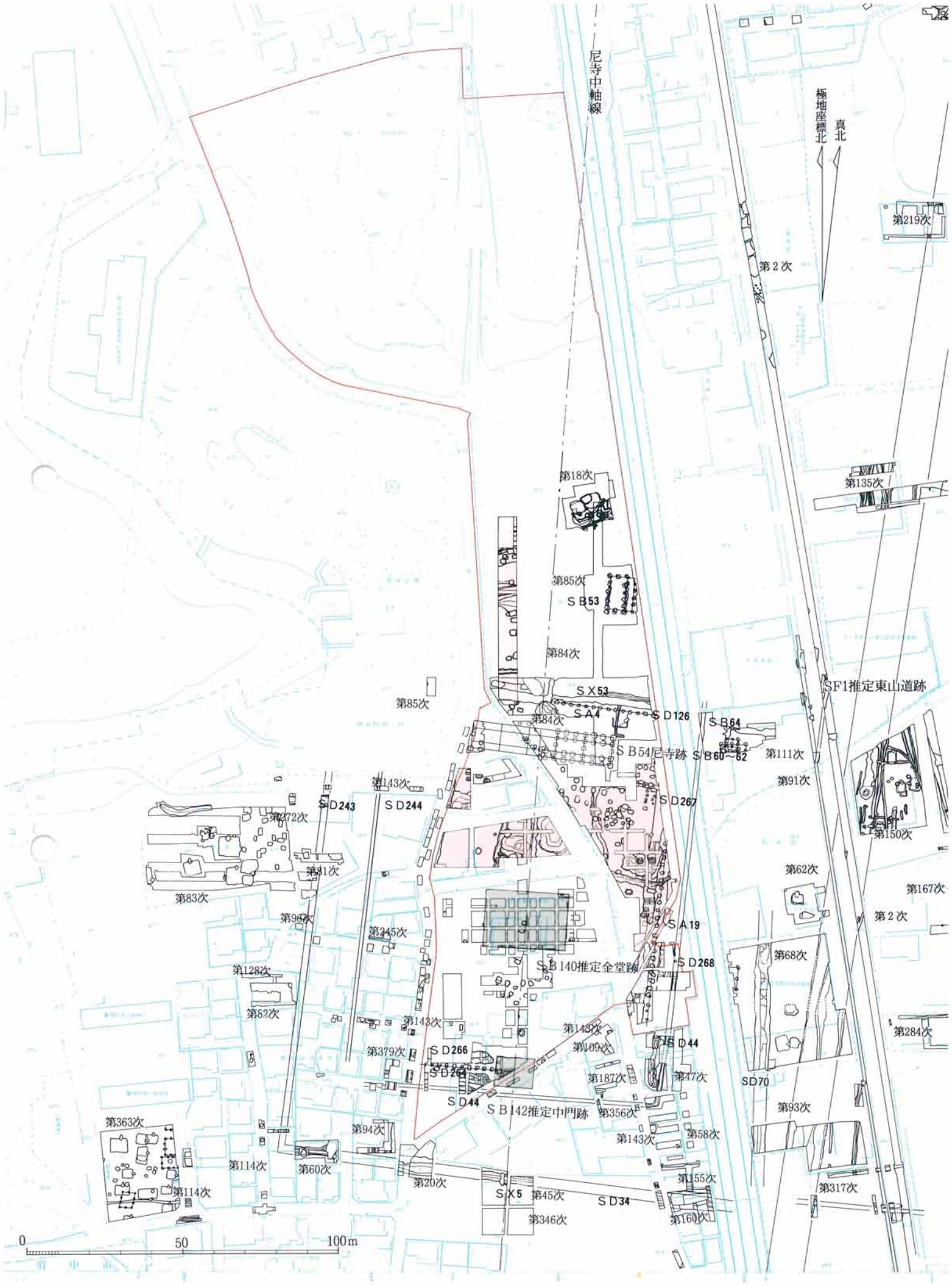
武蔵国分尼寺跡Ⅲ

平成6年度発掘調査概報

1996

国分寺市教育委員会

武蔵国分僧尼寺跡航空写真



第１図　武蔵国分尼寺跡全体図（朱線は史跡指定地，朱網は６年度調査区）

例　言

1．本書は東京都国分寺市西元町に所在する史跡武蔵国分寺跡（尼寺地区）の史跡環境整備事業に伴う平成６年度発掘調査の概要報告である。発掘調査は文化庁と東京都の補助を受け，国分寺市教育委員会が調査主体となり，国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。

2．調査は，武蔵国分寺跡第400次調査として，平成６年６月１日から平成７年３月31日まで（現場における作業は平成６年６月１日から平成７年２月24日まで），買収地内において，面積1915.82㎡の範囲について実施した。出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のＭＫを冠し，「ＭＫⅢ－400－以下台帳番号，登録番号」のように注記してあり，全て国分寺市教育委員会で保管している。なお，出土遺物は瓦類を主としてコンテナ190箱である。

3．調査に至る経過と調査計画，位置・立地と周辺の遺跡，調査のあゆみと現状，層序，調査方法については，『武蔵国分尼寺跡Ⅰ（平成４年度発掘調査概報）』を参照されたい。

4．図面中の方位は特記以外は僧寺中軸線を基準とした極地座標北を表示している（詳しくはⅢ－１参照）

5．遺構断面図の水糸高は特記以外は全て海抜標高65.5ｍに統一した。

6．遺構断面図における地山のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

Ⅲｂ層　Ⅲｃ層（ローム漸移層）　Ⅳ・Ⅴ層（ローム層）

7．遺構記号は下記のとおりとし，Ｐを除いて第１次調査より連続番号を与えている。

ＳＡ　塀跡・柱列跡	ＳＢ　礎石建物跡・掘立柱建物跡	ＳＤ　溝跡	ＳＦ　道路跡
ＳＫ　土坑	ＳＩ　住居跡・工房跡	ＳＸ　特殊遺構	Ｐ　小穴・小柱穴

なお，平成７年度より横穴墓・火葬墓・土坑墓・地下式横穴(墓)などの記号をＳＺとしているが，本報告では旧記号のままとした。地下式横穴については当初検出時のSXもしくはSKで登録してある。

8．遺物記号は次のとおりとし，調査次数毎に連続番号を与えている。本書においては実測図と写真図版の下段に表示した。なお，遺物には黄色ポスターカラーで注記してある。

ＰＨ　土師器	ＰＬ　土師質土器	ＰＫ　須恵器	ＫＡ　鐙瓦	ＫＢ　宇瓦	ＫＣ　男瓦
ＫＤ　女瓦	ＫＨ　塼	ＭＡ　銭貨	ＰＴ　中近世陶器	ＧＬ　砥石	

9．発掘調査から概報作成にいたるまで，文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関，諸先生方にご指導，ご助言を賜り，また地元住民をはじめ関係各位のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

荒井健治・板野晋鏡・須田　勉・塚原二郎・西野善勝・早川　泉・松田真一・松田隆夫・山下守昭

黒鐘自治会，府中市立武蔵台小学校，国分寺市立第４小学校

10．平成６年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体　東京都国分寺市教育委員会

調査担当　国分寺市遺跡調査会

役員および監事

会　長	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員長（平成６年７月４日退任）
	藤間恭助	〃　（平成６年７月５日就任）
副会長	吉田　格	調査団長
理　事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
	坂誥秀一	〃
	大川　清	国士館大学教授
	本多良雄	国分寺市長
	内野孝治	国分寺市教育委員会教育委員長

		野村武郎	国分寺市教育委員会教育長
		星野亮雅	国分寺市社会教育委員の会議議長
		本多寅太郎	国分寺市文化財保護審議会副委員長
		古関　豊	国分寺市文化財保護審議会委員　（平成６年７月５日就任）
		松井新一	（平成６年６月13日退任）
		秦　正博	東京都教育庁生涯学習部文化課副参事
		真崎治夫	国分寺市教育委員会社会教育部長（平成７年１月１日退任）
		山崎　宏	〃　（平成７年１月１日就任）
	監　事	榎戸　潔	国分寺市社会教育委員の会議副議長
		佐藤　攻	東京都教育庁生涯学習部文化課課長補佐兼埋蔵文化財調整係長
武蔵国分寺跡調査・研究指導員会			
	委員長	吉田　格	（考古）
	委　員	永峯光一	〃
	〃	坂詰秀一	〃
	〃	大川　清	〃
	〃	宮本　救	（古代史）
	〃	金丸義一	（建築史）
事務局	事務局長	天野　稔	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
	事務局員	宇都宮精一	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
		鈴木　晃	〃　庶務係員（平成６年７月１日転出）
		藤倉しのぶ	〃　庶務係員
		内藤達也	〃　〃（平成６年７月１日転入）
		松澤　修	
		宮保正美	
調査団	団　長	吉田　格	国分寺市文化財保護審議会委員
	主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
	調査員	福田信夫	〃　文化財保護係員
		上村昌男	〃　〃
		上敷領久	〃　〃
		滝島和子	〃　嘱託遺跡調査員
		岩崎玲子	〃　〃
		木下さおり	
	調査補助	井口正利・小池和彦・荒順・鈴木靖彦・桂弘美・飯島敏雄・島田智博・中田一夫・斉藤光司・多田多文治 川岸満子・東條一三・大下ゆみ・相馬しのぶ・若林雅子・桑名俊子・鈴木雪江 大羽正子・鈴木フミエ・川越裕子・小川輝子・小林幸江	

11. 本書は吉田格団長の監修のもとに，福田信夫が執筆，編集した。

目　　次

例　言
Ⅰ　調査の経過 …… 1
1　平成４・５年度調査の概要 …… 1
2　調査方法 …… 3
3　調査日誌抄 …… 4
Ⅱ　調査の概要 …… 5
1　講堂・経蔵地区 …… 5
2　鐘楼・中枢部区画東辺地区 …… 9
3　中枢部区画東門地区 …… 13
4　北辺地区 …… 15
Ⅲ　出土遺物 …… 17
1　土器類 …… 17
2　瓦塼類 …… 17
3　銭貨・砥石 …… 18
Ⅳ　まとめ …… 25

挿図目次

第１図　武蔵国分尼寺跡全体図
第２図　６年度調査区遺構配置図
第３図　講堂・経蔵地区全体図 …… 6
第４図　鐘楼・中枢部区画東辺地区全体図 …… 7
第５図　SB154掘立柱建物跡２－３柱穴断面図 …… 10
第６図　SX109掘立柱遺構断面図 …… 10
第７図　SX114地下式横穴断面図 …… 11
第８図　SK1503土坑断面図 …… 12
第９図　SB152東門跡(SA19塀跡柱穴36)断面図 …… 13
第10図　中枢部区画北辺・寺域北辺地区全体図 …… 14
第11図　SK1529土坑断面図 …… 15
第12図　出土土器・中近世陶器実測図（１～12は１：3, 13～20は１：４） …… 19
第13図　出土鐙瓦・宇瓦実測図（１：４） …… 20
第14図　出土男瓦・女瓦(1)実測図（１：４） …… 21
第15図　出土女瓦(2)実測図（１：４） …… 22
第16図　出土女瓦(3)・塼実測図（１：４） …… 23
第17図　出土銭貨・砥石実測図（銭貨拓は実大，砥石は１：２） …… 24
第18図　武蔵国分尼寺跡中枢部建物配置図 …… 26

写真目次

写真1　金堂地区全景（東から）
写真2　SB140推定金堂跡版築土
写真3　中門地区全景（北から）
写真4　金堂前面地区全景（北から）
写真5　SB54尼坊跡全景（南から）
写真6　中枢部区画東辺地区全景（北から）
写真7　東門推定地地区全景（西から）
写真8　市道下での東門の調査
写真9　遺跡見学会

図版目次

巻首　武蔵国分僧尼寺跡航空写真
図版1　1　調査区全景（南から）　2　講堂・経蔵地区全景（南から）
3　SX120東西土層断面（南から）　4　SX119A遺物出土状況（西から）
5　SF3道路跡（南から）
図版2　1　鐘楼地区全景（南から）　2　SX110A・B, SX114・134全景（南東から）
3　SX134竪坑部（南から）　4　SK1503土坑（東から）
図版3　1　鐘楼地区北半部全景（南から）　2　SB151A・B, 154掘立柱建物跡（北から）
3　SB154 2−3柱穴断面（東から）　4　SX109掘立柱遺構断面（西から）
図版4　1　東門地区全景（南西から）　2　SB152東門跡（東から）
3　柱穴36断面（南から）
図版5　1　北辺地区全景（北から）　2　SK1529土坑全景（北から）
3　SK1529土坑土師器壺出土状況（北から）　4　SD298溝状遺構断面（部分）（西から）
図版6　出土土器・中近世陶器（土器・PT03は1：2，中近世陶器は1：3）
図版7　出土鐙瓦・宇瓦（1：4）
図版8　出土男瓦・女瓦（1：4）
図版9　出土女瓦・塼（1：4）
図版10　出土銭貨・砥石（1：1）
図版11　出土文字資料集成(1)（1：1）
図版12　出土文字資料集成(2)（1：1）

第2図　6年度調査区遺構配置図

Ⅰ　調査の経過

1　平成４・５年度調査の概要

本報告に至る前年度までの調査成果を地区ごとに要約する。

金堂地区（平成４年度）

推定金堂跡掘込み地業の規模を東西26.7m（90.5天平尺，以下同じ），南北18.5m（62尺）と確定した。版築土は約1.6m遺存していたが，礎石据付痕跡や基壇外縁の化粧などは造成工事により削られ残存していない。

推定中門，中枢部区画南辺西側地区（平成４・５年度）

推定金堂心から49.2m（165尺）南において東西12.5m（42尺），奥行推定9.6m（32.5尺）の規模の掘込み地業とその中央西側に取り付く柱間８尺の掘立柱塀と溝が確認され，僧寺と同様に両者はセットで中枢部を区画する施設と推定される。残存する版築土は僅か0.4mほどで，削平により礎石据付痕跡は確認できなかった。塀，溝共に２時期ある。

掘込み地業下の西妻柱にあたる位置にてSA18塀跡１期目の柱穴を確認し，SB142推定中門の建替えを明らかに出来た。SA18塀跡１期目に伴う中門跡の痕跡は残らないが，間口が10mを越えない規模と考えられる。地業下塀柱穴への版築の状況から，塀の建替えと門の建替えが一連の工程でなされたことが伺える。

金堂前面地区（平成４・５年度）

金堂前面地区において特殊な掘立柱遺構を複数確認した。この内，２本一対のものは金堂前面にあって東西に配置され，まさに庭儀法会に伴い立てられた幢竿支柱と考えられる。１本柱のもの２基は，中軸線に近い位置で，太い柱で相当に高いか重心位置の高い構造物を支えていたものと考えられる。

講堂推定地地区（平成４・５年度）

講堂については，推定地の北と北東にトレンチを設定したが，確認出来なかった。中近世の遺構と重複している上に，近年の造成工事による削平により該期遺構の残りが悪くなっていることや，僧寺創建講堂のように地上積み上げ部のみの基壇である可能性もあることが考えられ，一層発見を難しくしているものとみられる。

但し，推定地の北西と北東に，幢竿支柱と考えられる掘立柱遺構が複数並んでいることが推測されるに至り，講堂はこの位置より南にあるものと思われる。

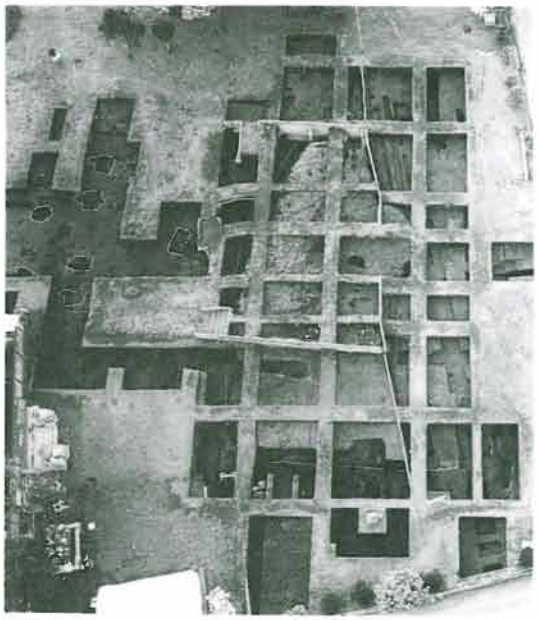


写真１　金堂地区全景（東から）

写真２　SB140 推定金堂跡版築土

写真３　中門地区全景（北から）

中軸線の確定（平成４年度）

既に定まっている尼坊心と新たに確定した推定金堂心及び推定中門心はほぼ同一線上になるので，これをもって現段階の尼寺伽藍中軸線とする。僧寺伽藍中軸線に対して北で約4°30′東に偏る。真北に対して西へ2°30′の偏りである。

尼坊地区（平成５年度）

SB54尼坊跡の調査は今回で３度目であり，新たに３個の礎石据付掘方を確認した。礎石は全く残っていないので，建物規模は概数となるが，間口44.5m～44.7m（３m弱等間），奥行き９m（身舎2.4m，廂2.1m）である。また，軒廊跡については調査区でその存否を確認出来なかった。

鐘楼推定地地区（平成５年度）

鐘楼推定地の一帯においても，中近世の遺構によりローム層が削平されており，鐘楼跡礎石据付掘方は検出出来なかった。但し，鐘楼は規模も小さく，位置想定が難しいので，調査区の設定が当を得ていないことも考えられることから，６年度にさらに周囲を広く調査することとした。

中枢部区画東辺地区（平成５年度）

中枢部区画東辺については，以前に発見されているSD44溝跡の内側に掘立柱塀があるものとみて調査区を設定したところ，予測どおりSA19塀，内側溝SD267と外側溝SD268を確認することが出来た。但し，SA19塀に建替えは無く，南面と異なる。また，一部柱間が乱れ，2.2m，2.5m，3.0mなどの部分がある。付随する内外の溝は共に２時期あり，土坑状に連続する形態，両期の規模，堆積土など南面と共通する。

東辺塀の方位は東偏６°30′で，尼坊の方位（東偏６°56′）に最も近い。そして金堂心の位置で中軸線から42.44mを測る（方位のずれで，南辺では40.65mとなる）ので，中枢部区画の東西規模はその２倍の約84.9mと想定される。

東門推定地地区（中枢部区画東辺）（平成５年度）

内側溝SD267がＡ・Ｂ期共，SA19塀柱穴33～36付近で途切れる。空白部の幅は南北約6.5m以上で，丁度この位置がSB140推定金堂心にあたり，周囲に柱穴が無いことから棟門程度の東門跡が想定されるに至った。市道直下のため，６年度に再発掘することとした。

写真４　金堂前面地区全景（北から）

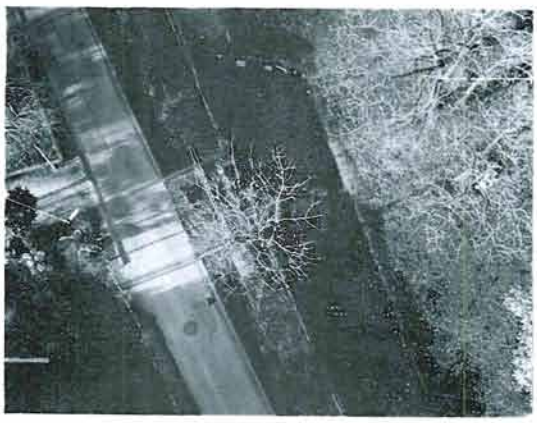


写真５　SB54尼坊跡全景（南から）

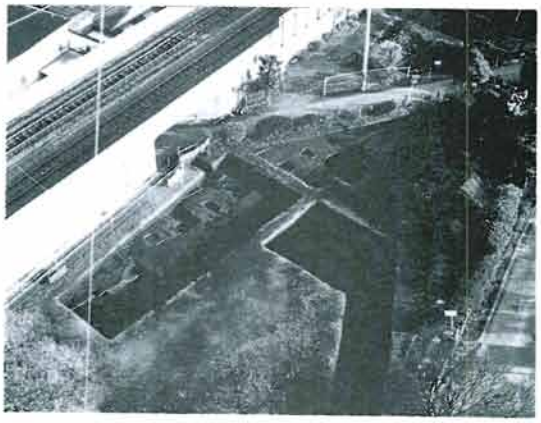


写真６　中枢部区画東辺地区全景（北から）

写真７　東門推定地地区全景（西から）

2　調査方法

調査基準線は従来どおり，僧寺伽藍中軸線に合わせた極地座標系によっており，尼寺区域はそれの第三象限にあたる。極地座標原点は国家座標のⅨ系　X＝－34,446.024，Y＝－32,449.078で，極地座標北方向角は353°05′32″を示す（数値は平成７年７月19日に再測し，若干訂正した）。発掘区の呼称など詳しくは，『武蔵国分尼寺跡Ⅰ』を参照されたい。

調査の目的と調査区の設定

６年度調査は中枢部区画内主要建物の内，未発見の講堂・鐘楼・経蔵跡の検出と中枢部区画東辺施設の再調査並びに同東門の確認を主目的とし，４カ所の調査区を次のように設定した。

①講堂・経蔵地区　平成４年度に層位確認の上，５年度に推定地の北と北東にトレンチを入れ，探りを入れたが確認できなかったので，推定地中央に建つ民家を避け，その西側と南側全面を調査することとした。

②鐘楼・中枢部区画東辺北地区　同様に，平成５年度のトレンチ調査では，講堂・鐘楼共確認出来なかったが，講堂推定地の北東に幢竿支柱と考えられる掘立柱遺構が複数並んでいることが推測されるに至ったので，重複する中近世遺構の状況を把握するためにも中枢部区画東辺にかけて全面調査することとした。

③中枢部区画東門地区　平成５年度の調査により，内側溝SD267が推定金堂心の東方付近で途切れることなどから棟門程度の東門跡が想定されるに至ったが，市道直下のため，今年度に再発掘することとした。

④中枢部区画北辺・寺域北辺地区　中枢部区画の北辺と寺域区画の北辺の状況は，中軸線の東側のみで確認されているSA4塀跡が中枢部区画施設と考えられるものの，その他の状況が不明であるので寺域外北方にかけて長大な調査区を設定することとした。

現況と層序

今年度新たに調査を行う北辺地区は，国分寺崖線下の黒鐘谷に位置しており，公有地となる前の大規模な造成によって尼坊付近とレベル差の無いように埋め戻されている。埋め戻し土の深さは調査区の南端で0.5m，北端で1.1mである。調査区北端では，Ⅱ層およびⅢ層の黒褐色土が厚くなり始める。

標準土層は，Ⅰ層表土がａ造成土①（ローム，ガラ），ｂ造成土②（ローム混じり暗褐色土），Ⅱ層黒褐色土，Ⅲ層暗茶褐色土，Ⅳ層黄褐色土ソフトローム，Ⅴ層黄褐色土ハードロームである。

経蔵地区の南側と講堂地区から鐘楼地区にかけて，遺構の下部が深くなる部分などにおいて，Ⅴ層黄褐色土ハードローム以下が水の影響を受けて変質していることを確認出来る範囲がある。西は経蔵南側地区の西端で，表土下のⅤ層が暗褐色土（上層）と暗灰褐色土（下層）に粘質化しており，上層は小石などの挟雑物が多く再堆積したものとも考えられる。上層上面は海抜標高65m，下層上面は同64.5mである。東端はSX114地下式横穴の底面で見られ，63.6m以下が砂質・粘質化している。北端はSX112掘立柱遺構の底面で，65m以下が白色もしくは赤色に粘質化している。南端は講堂地区南端で64.9m以下で白色粘土化している。講堂地区中央では64.9m以下，鐘楼地区の土坑集中地区（SK1474）では64.8m以下が変質している。即ち，その広がりは南北が25m前後，東西が70m以上に及んでいる。

平成４年度の講堂地区に試掘坑を入れた際の所見では，ローム層形成時より水つきの状態であったと考えられ，地下水位の上昇と黒鐘谷戸からの流入とが複合的に作用したものと考えられる（松田隆夫氏教示）。

現況と層序について詳しくは『武蔵国分尼寺跡Ⅰ』を参照されたい。

3　調査日誌抄

5月11日　地元黒鐘自治会（会長山本君子氏）に協力依頼。史跡地内と周辺居住者宅を訪問し協力依頼。調査区周辺に広報板設置。周辺道路を通学路とする国分寺市立第4小と府中市立武蔵台小を訪問し各校長に協力依頼。

5月15日　国分寺市報にて発掘再開のお知らせと5年度の調査成果を速報。

5月17日　調査区内の樹木移植開始。調査対象地区に安全柵設置。

6月1日　国分寺市と国分寺市遺跡調査会において調査委託契約締結，本日より調査開始。機械により表土除却開始。ハウス・トイレ搬入（リース）。

6月9日　梅雨入り。

6月15日　機械による表土除却終了。講堂・経蔵地区より遺構確認，精査開始。経蔵推定地付近はV層（ハードローム）まで削られており，経蔵の痕跡は確認されない。

7月12日　梅雨明け。

7月13日　経蔵地区北側のSX120掘立柱遺構は昨年確認したSX108と東西に並ぶ幢竿支柱と判明。

7月18日　午後大雨。

8月4日　東門地区（現道部分）調査開始。

8月12日　SA19塀跡の№34と№35の柱間が3.6mと広く，周囲に付属する柱穴が見られないことから，予測どおり棟門と確定。

8月15～16日　調査会夏休み。

8月23日　東門地区ポールによる全景写真（委託）。

8月25日　市教委主催「夏休み発掘体験教室」実施。

9月5日　東門地区道路復旧工事終了。

写真8　市道下での東門の調査

9月13日　秋雨前線停滞し大雨となる。

10月7日　講堂・経蔵地区の確認作業終了し，鐘楼地区の精査に取り掛かる。

10月19日　鐘楼地区北端のSX127火葬墓内より渡来銭4枚出土（祥符元宝，淳熙元宝，永楽通宝，洪武通宝）。

10月19日　鐘楼地区にて多数確認された土坑を半裁し始める。壁がオーバーハングし，底面に周溝があるものが目立つ。

11月18日　SX114地下式横穴竪坑部上部より重さが約700kgのチャート1点が出土。尼寺建物の礎石に用いられたものか。

12月5日　調査研究指導委員会。

12月6日　鐘楼地区北東部で昨年確認されたSB151掘立柱建物跡の北側に，2間四方の建物を確認。掘方の規模が大きい。

12月21日　気球による空中写真撮影（委託）実施。

写真9　遺跡見学会

12月22日　遺跡見学会，170名参加。

12月26日　越年のため，片付け。

1月5日　再開。SA19柱穴№41などを断割り。

1月12日　今月中の終了見込みがたたないので，2月末までの延長が決定。

1月17日　阪神・淡路大震災（東京は震度1）。

1月26日　北辺地区の確認面や土坑内より，永楽通寶，嘉祐元寶，熙寧元寶などが出土。北端のSK1529土坑内より古墳時代前期（五領式）の土師器壺1個体が出土。

2月8日　遺構内への砂埋め戻し開始。

2月24日　原状復旧を終え，発掘調査完了。

Ⅱ　調査の概要

平成６年度の調査は総面積1915.82㎡を実施した。

当初の目的の内，講堂・経蔵・鐘楼の３堂宇の確認は果たす事が出来なかった。が，中枢部区画東門遺構は予測通り確認出来たほか，昨年確認された講堂想定地の北東と北西位置の柱穴が幢竿支柱遺構と判明し，講堂の想定位置を確実にすることが出来るなどの成果が得られた。また，全体に及んで中近世の遺構と遺物が確認され，尼寺廃絶後の状況が看取される資料を得ることが出来た。

以下，講堂・経蔵地区（調査面積525.71㎡，内訳は講堂地区341.06㎡，経蔵地区南側110.97㎡，経蔵地区北側73.68㎡），鐘楼・中枢部区画東辺地区（同883.73㎡），中枢部区画東門地区（同171.08㎡，内訳は道路地区 57.54㎡，南側33.96㎡，北側79.58㎡），北辺地区（同335.3㎡）の４地区に分け説明する。

1　講堂・経蔵地区

講堂跡はSB140推定金堂跡とSB54尼坊跡の中間の中軸線上に，経蔵跡はその西側に想定されるので，民家の残る一画と東西道路を除いてＬ字形に調査区を設定した。残存していれば，講堂跡の南半分と経蔵跡が確認される予定であったが，今回あけた限りでは，痕跡をとどめていない。

確認された遺構の内，確実に古代の遺構とされるのはSX120掘立柱遺構のみで，他のSK1430～1434土坑，SK1435地下式横穴，SD276溝跡，SF3道路跡，SX119A～C,121不明落ち込み，SX123・124焼土遺構と小穴68個は全て出土遺物と堆積土からみて中近世遺構と考えられる。

遺構確認面はⅣ層（ソフトローム）がSX119A南側の一部に残り，Ｖ層（ハードローム）がSX119Aの周囲，SX121の北側に残る他は，変質したローム層が露出している。

SX120 掘立柱遺構

東西1.2m，南北1.0mの方形掘方で，上面が削平され深さ0.6mと浅い。径0.6mの柱抜き取り痕跡がある。昨年確認されたSX108掘立柱遺構と東西に並ぶ位置関係で柱間約6mを測る。その間はさらに深く攪乱が及び，やや離れた位置にSK1386土坑を確認したにとどまった。

中近世の遺構

経蔵北と南地区の西側で，南北に延びる**SF３道路跡**の東端部を確認した。南地区では地山のＶ層（ハードローム層）がやや硬化しているだけであるのに対し，北側では0.3mほどの構築土がみられる。側溝は無い。鎌倉街道（上の道）に比定されているルート上にあたり，北方の府中市武蔵台東遺跡（都営川越道住宅建替地区）では道路跡の最も堅い硬化面直上に富士宝永火山灰(1707)が検出されている。従い，鎌倉時代から江戸前期まで長期に存続し，さらにこの上に遺構として痕跡をとどめない道路があって現道にひきつがれている可能性がある。

SX119A不明落ち込みは平面不整長円形で東西8m以上南北13m以上あり，深さが1mほどの擂鉢状を呈する人為的窪みである。西側には**SX119B不明落ち込み**が並ぶようにある。こちらも同じ窪みで，東西9m以上，南北６m以上，深さ1.3mほどで，上部をSX119Cにより削平されている。SX119A堆積土は上層が締まりの強い黒褐色土，下層は粘性の強い黒褐色土で，壁際にはロームブロックを多く含む。下層には多量の瓦片や礫に伴い14～16世紀代の陶器片（第12図18の常滑甕・同図16の捏鉢や同図14の瀬戸捏鉢・灰釉平碗，同図12の瀬戸系灰釉皿，在地系素焼き壺など）が混入している。SX119Bからも同じく14～16世紀代の陶器片（常滑甕・壺・捏鉢や在地系素焼き壺など）が出土し，この内，在地系素焼き壺は同一個体である（さらに鐘楼地区のSK1474・1475土坑と北辺地区のSK1517土坑出土のものとも同一個体である）。このことから，SX119AとSX119Bはその埋没過程において同時に並列して存在していたことがわかる。SX119Aの上層には18～19世紀代の陶器片（第12図15の常滑甕

第3図　講堂・経蔵地区全体図

第4図　鐘楼・中枢部区画東辺地区全体図

や瀬戸碗・徳利など）が混入しており長期にわたり開口していたものと考えられる。

SX119C不明落ち込みは，SX119Aを切って，上面幅3m，南北13m以上の溝を東壁とし，溝より西側を東西11m以上平坦に削平したもので，西端をほぼ平行するSD276溝跡により切られる。開削時期は重複関係からSX119A・Bより新しいが，堆積土はいづれにも類似しており，それほど時期差はないものとみることが出来る。15～20世紀代の陶磁器片（在地系土鍋，美濃灰釉碗・磁器碗，京焼系小碗）が出土するが，SX119Aと同じく長期に及ぶ開口の結果とみることが出来る。**SX121不明落ち込み**やSB140推定金堂掘込み地業の北縁にかかるSX140不明落ち込みなどとも似ており，これらが同一で西側の道路に向かってコの字形に開くものと推測される。**SD276溝跡**やその西側の平坦面上の堆積土は表土層の範囲でとらえられ，20世紀代の耕作に伴うもので，SX119C埋没中の窪地を利用したものと考えられる。

SK1435地下式横穴の天井部は陥没しており，陥没により出来た窪みにSX119B中層に対応する黒褐色土が堆積する。竪坑部は径0.9m，深さ1.0m～1.2mの円筒形で，底面は横穴部側へ傾斜している。横穴部は東側にあり，東西2.2m，南北1.6m以上の南北にやや長い長方形プランで，底面は竪坑部底面より0.6mほど下がる。竪坑部底面から横穴部側にかけてロームブロック混じり土が堆積した後に陥没したものとみられる。壁はやや湾曲したドーム形。底面には全体に鉄分が付着し堅くなっている。

SK1431～1434土坑は全て長方形プランで，底面に周溝がめぐり，四壁がやや内傾し立ち上がる特徴を有する。次節でA形態と分類するものである。

SX123・124焼土遺構は確認面で焼土粒が多く見られるもので，時期不明である。

2　鐘楼・中枢部区画東辺地区

鐘楼跡は，僧寺の例により，SB140推定金堂跡の北東位置に配置され，2間×3間（4.8m×5.4mほど）の南北棟礎石建物で坪掘り地業によるものと推測される。平成5年度のトレンチ調査では確認出来なかった。同じくこのトレンチで講堂跡の北東部分の検出をも目指したが果たせなかった。そこで，西側道路寄りと東側一帯を広く調査することになった。併せて，尼坊前面の幢竿支柱列やSX114地下式横穴など中世遺構の確認を行うこととした。

結果は，講堂・鐘楼の痕跡は見出せずに終わり，主目的は達成出来なかったが，幢竿支柱遺構や中世～近代遺構の確認の他，尼坊南東に掘立柱建物を検出し，中枢部区画内北東部における状況を明らかにすることが出来た。

確認された遺構の内，確実に古代の遺構といえるのは，中枢部区画東辺施設のSA19掘立柱塀跡とSD267・268溝跡，SB151A・151B・154掘立柱建物跡，SX109・111・112掘立柱遺構，SK1389・1406・1514土坑のみで，他のSD292溝跡，SK1389～1391・1404・1405・1411・1455～1487・1503～1506土坑，SX110A～C不明落ち込み・SX114・134地下式横穴，SX113・115・127・128・132火葬墓と小穴308個は全て出土遺物と堆積土からみて中世～近代の遺構と考えられる。

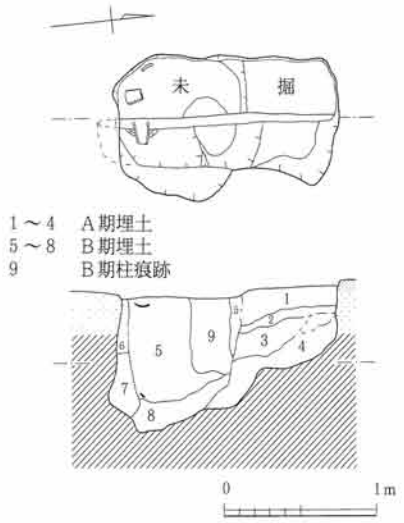
中枢部区画東辺施設（SA19塀跡，SD267　・268　溝跡）

この区域は昨年確認した範囲内で，今回はSA19柱穴41・45・46を断割って建替えの無いことを再確認した。柱位置はおおむね掘方の東側にあって，抜き穴下部の径は0.3m～0.4mほどである。抜きの方向は確認できる4例の内3例が南へ，1例が北へである。抜き穴内にはロームブロックと白色粘土粒が多く混入するのが確認される。これはSA18南辺塀2期目の抜き穴内に共通する。付随する溝跡についての新たな所見は無い。

SB151A・151B・154　掘立柱建物跡

昨年度にSX109・111・112掘立柱遺構の東への延長を探るために設定したトレンチにて確認されたSB151掘立柱建物跡全体を追ったところ，SB151AとSB151Bの2棟の建物と判明し，さらにSB154掘立柱建物跡をそれらの北側で発見した。**SB151A掘立柱建物跡**は東西推定2間×南北2間の総柱建物と推定され，柱間は東西が2.4m，

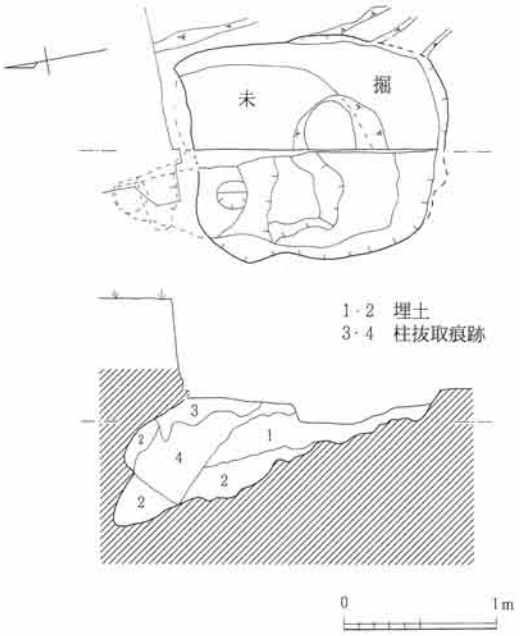
南北が2.2m＋2.4mを測る。**SB151B掘立柱建物跡**は東西２間もしくは３間×南北２間で，柱間は東西が1.7m，南北が3m等間と推測される。２棟はほぼ同じ位置にあるが新旧関係は不明である。いずれも，隅丸方形の掘方の一辺が0.5m～0.8m，深さ0.2m～0.5mと浅く小規模である。柱痕跡の径は0.15m～0.2mほどである。建替えは無い。**SB154掘立柱建物跡**は東西２間4.4m（2.2m等間），南北２間4.8m（2.4m等間）で，１回の建替えがある。掘方は長方形で，短辺が0.8m～1m，長辺が1.2m～1.5m，深さが1mほどあり，大型の部類に入る。掘方の底面は建物内側に下る階段状になっていて，柱位置が最も深い。Ｂ期の掘方はＡ期抜き穴を利用したもので，柱痕跡の径は0.25mを測る。Ａ期埋土は黒色土にロームブロックを主体とし，Ｂ期埋土には白色粘土ブロックを含むなどの特徴がSA18・19塀跡に良く似る。また，掘方の形態は幢竿支柱遺構のそれに似ている。３棟の切り合いは無く新旧関係は不明。SB151A・SB151BともSD267B期溝より古い。SB154の２－３柱穴内から須恵器坏（第12図１）が，１－２Ｂ期柱痕跡内下部から須恵器蓋（第12図５）が出土しており，共に国分寺Ⅱ期（塔再建期，９世紀代）に比定出来ることと，埋土の特徴を加味すると，SB154Ａ期は創建期にあげることが出来る。SB154とSB151Bは重複しており並存しないが，SB154とSB151Aとは1.5mほどの間隔があるので並存していた可能性もある。３棟の方向はほぼ同じで約７度東偏し，尼坊の方向に合致する。



第５図　SB154 掘立柱建物跡 2-3 柱穴断面図

SX109 ・111 ・112 掘立柱遺構

これらは昨年検出されており，今回は東側と南側を広くあけたところ，関連のあるものは無く，断割りによっても柱穴と確認されたので，東西に並ぶ幢竿支柱遺構との推測を裏付けた。柱間は3.4mほどの等間である。掘方の上面は東西1.5m，南北1.7mの長方形で，底面が北側に向かって傾斜していて，南側は0.3mほどと浅いが，北側は1.2mと深く，その上，約0.3m～0.5mオーバーハングしている。柱抜き取り痕跡が最も深い坑底に向かって斜めに観察されたので，仰角54度前後で立っていたものと考えられる。径は0.4mほどである。SX109の西に既検出の**SK1389土坑**は，極端なオーバーハングは無いものの規模や埋土において共通するので，幢竿支柱遺構である可能性が高い。ただし，SX109との柱間は3mと短い。また，昨年壁際に一部を確認した**SK1406土坑**は，規模は小さく柱穴の痕跡は確認できないが，堆積土や北壁がオーバーハングすることなどの共通点があるので，別の並び（西側のSX108・120の延長線上にあたる）の幢竿支柱遺構である可能性がある。

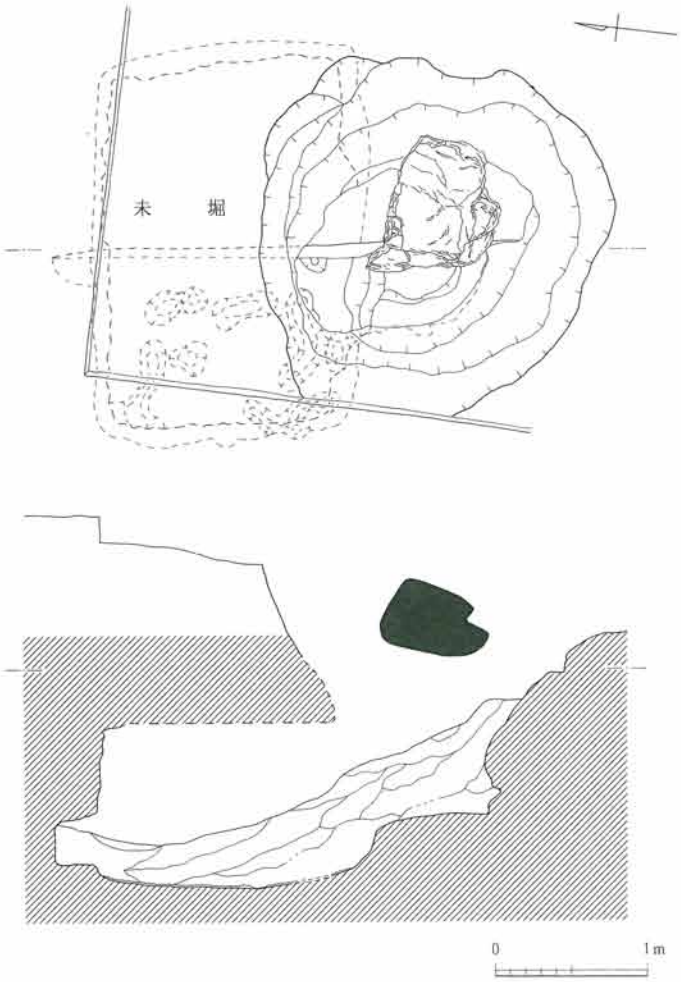


第６図　SX109 掘立柱遺構断面図

中近世の遺構

SX110A不明落ち込み，SX114・134地下式横穴　SX110Aは平面がくの字形の窪みで，SD267中枢部区画内側溝にほぼ半分が重なっている。幅4m～5m，さしわたしが東西13m，南北9mを測る。深さ1mほどで断面が擂鉢

状の落ち込みで，両翼が浅くなる。堆積土は粘性が強い部分と砂っぽい部分とがあって水の影響を強く受けているものと思われる。堆積土内からは全体に，多量の瓦・礫・須恵器片などと共に13～15世紀代の陶器片（瀬戸灰釉瓶子・捏鉢，常滑捏鉢）が出土している。内側屈折部に２基の地下式横穴が東西に並ぶ。東側が昨年確認されたSX114，西側がSX134で，規模・形態において類似点が多い。南側に上部が擂鉢状で円筒形の竪坑部を，北側に東西に幅のある矩形の横穴部を置き，ほぼ水平な竪坑部底面（共に標高63.5m）より，60度の下り傾斜で0.5m～0.6m下がって横穴部底面となり，0.5m～0.6m上がって横穴部天井面となる。底面は中央部が0.1m深く，天井は中央部が0.1m低い。壁は天井に向かって0.2mほど内側に傾くが，ほぼ直線的である。横穴部は浅いところで0.2mほどで，竪坑部から流入した土で覆われ，大半が空洞となっていた。竪坑部の上面径はSX114が2.2m，SX134が２m，底面径は同じく１m，0.7m，横穴部底面は共に東西2.6m（SX134は南壁が2.8m，北壁が2.1mと台形を呈する），南北1.8mで天井高は中央部で共に1.1mである。SX114の堆積土とSX110Aのそれは同じであり，開口していたものが同時に埋没したものと考えられる。竪坑部の中央上部に尼寺建物に所用されたと考えられる礎石（石材はチャート，重量700kg：クレーンによる，１m×0.8m×0.7m）が径0.1m～0.2m前後の礫や瓦片とともに出土した。石の底はSX110A底面よりやや低い。SX114の横穴部中央底面上から砥石（第17図19）が出土している。



第７図　SX114　地下式横穴断面図

SX113・115・127・128・132火葬墓　昨年確認されていたSX113（旧SK1392）とSX115に加えて，SX127・128・132の３基を加え，５基となった。いずれも幅0.4m～0.9m，長さ0.6m～1.1mの不整長円形で，深さ0.2m～0.3mと浅い。焼骨片もしくは焼骨粉のほか，炭化物・焼土が認められ，SX113・132では底面（構築土上面）が被熱を受け，一部赤色化していた。SX113からは昨年５枚の銭貨（開元通寶・至和元寶・熙寧元寶・元祐通寶・銭種不明）が錆により付着して出土している（『武蔵国分尼寺跡Ⅱ』）。今年度においてはSX127から祥符元寶（第17図６）の他に以下の３枚の銭貨が錆で付着して出土した。淳熙元寶（第17図７）・永楽通寶（第17図８）・洪武通寶（第17図９）。永楽通寶を最新銭としていることから15世紀以降の時期が与えられる。

SK1390・1391・1404・1405・1411・1455～1487・1503～1506土坑・小穴　この内，SK1390・1391・1404・1405・1411土坑が既検出で，SK1478・1484・1485土坑が未掘である。土坑は次の３種に分類出来る。

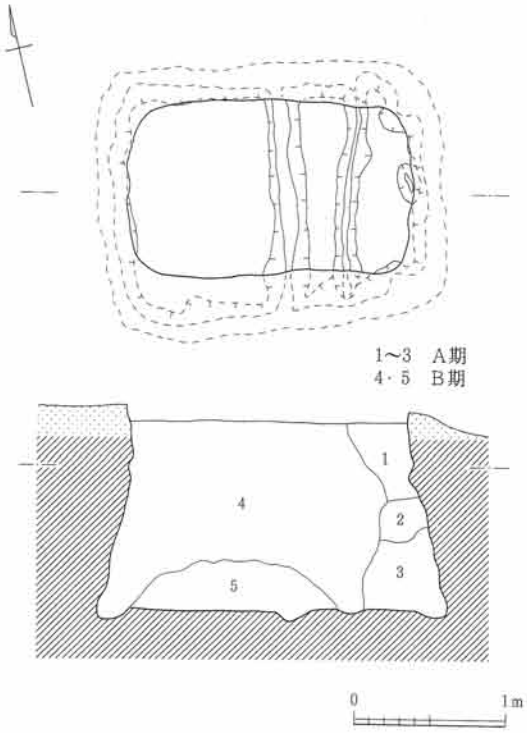
A形態　「袋状土坑」と仮称する土坑で，特徴は①壁が内傾しており底面が開口部より広い②壁は平らなものと湾曲するものとがある③底面は平坦④底面には周溝が全周する⑤平面形は隅丸長方形が多い⑥堆積

土はロームブロックが多く入るものが多く，人為的に埋め戻したものと考えられることなどである。SK1404・1455～1459・1461・1463～1466・1473～1475・1477・1479・1487・1503・1505土坑の19基が該当する。規模は短辺1m～1.2m，長辺1.3m～2m，深さ0.3m～1.35mで，深いものが多い。SK1455は北側に横穴部（奥行き0.9m，高さ0.6m）と，底面に径0.7m，深さ0.7mのピットがある特異な例である。また，SK1503は唯一完掘した例であるが，東西上面幅1.9m，底面周溝外側幅2.35m,同内側幅1.9m，南北が同じく1.15m，1.8m，1.35mで，中央に周溝から続く南北横断溝がある古期と東側を埋めた新期がある。新期の規模は南北は同じで，東西が同じく1.45m，1.8m，1.4mである。

B形態　隅丸長方形の土坑で，SK1390・1391・1405・1460・1462・1467・1470～1472・1480～1483・1486・1504・1506土坑の16基が該当する。規模は短辺0.5m～1.4m，長辺0.8m～2m，深さ0.3m～0.8mである。

C形態　長円形（不整円形を含む）の土坑で，SK1411・1468・1469・1476土坑の４基が該当する。

覆土からは縄文土器，須恵器，土師器，瓦に混じって中世陶器などが若干出土する土坑がある。全てA形態で，SK1459から在地系素焼壺（14世紀）と常滑甕（15世紀）が，SK1465土坑から在地系素焼コンロ（19世紀後半）が，SK1466から瀬戸灰釉碗(15世紀）が，SK1474もしくは1475土坑から在地系素焼壺（14世紀）が出土した。土坑群は（少なくとも土層観察用に残したベルトの断面においては）SX110C（旧耕作土）の下層で確認され，SX110C溝に重複するSK1404・1462・1463・1466土坑は全てSX110Cに切られるので，これらに先行するものと思われる。また，A形態のSK1487土坑が15世紀代前後のSX110Aに切られ，SK1465土坑を除く３例で14～15世紀代を下限とする中世陶器を出土しているので，堆積土の所見を合わせて，これら土坑群の大半は14～15世紀代の所産ととらえられる。小穴の分布は土坑群のそれとほぼ重なり，堆積土も似るが，土坑との切り合いでは新しい事例がほとんどである。６例のみ柱穴と思われるものを確認したが，建物にはならない。



第８図　SK1503 土坑断面図

なお，この中には古代の土坑も含まれているものとも思われ，堆積土からはB形態のSK1462土坑などが候補としてあげられる。また，B形態のSK1405土坑は東西2.5m，南北1.2m，深さ0.4mで，多量の瓦片と若干の礫と・板碑片が隙間無く入る瓦溜で，堆積土からSX110Cに伴うものと考えられる。

SX110C・SX110D・SD292溝跡　SX110Cは幅２m，深さ0.7mの小溝（囲みの内側に向かってなだらかな立ち上がりとなる）に囲まれた南北29m，東西29m以上ある略方形の範囲を有する。溝の北と南はほぼ直線的で，西辺がゆるやかに屈曲している。溝で囲まれた内側には削平されたローム面を覆って現表土との間に黒褐色土層（現表土に比べやや黒色味があり，ロームブロックを含む）が0.2m～0.3mあり，溝内の堆積土と同じである。溝内からは少量の須恵器・土師器・瓦片に混じって，美濃灰釉碗（18世紀）と常滑マンガン釉土管(19世紀後半）が出土していることから，SX110Cは19世紀後半以降の耕作地で溝はその周囲に掘削した根切溝と思われる。SX110Dは断面箱形で東西に長く延びており，ロームブロックなどにより埋め戻されており，区画南辺溝に近い位置にあることとその特徴から耕作に伴う貯蔵用穴（イモ穴）と考えられる。

3　中枢部区画東門地区

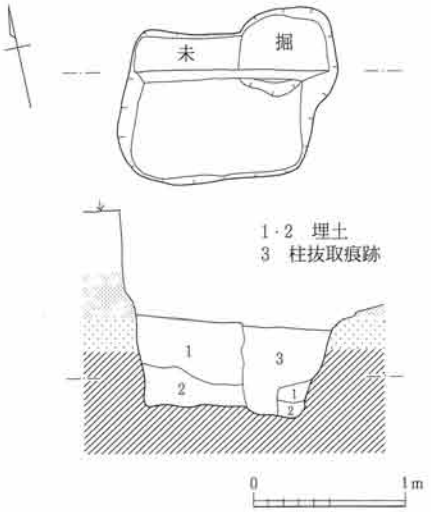
中枢部区画東辺はSA19掘立柱塀跡と付随するSD267溝跡（内側）・SD268溝跡（外側），SD44溝跡で構成される。東辺塀の方位は尼坊方位に近い東偏6°30′で，中軸線とは平行しない為，中軸線からの距離は40.65m（南）～44.70m（北）を測る。外側にSD44溝跡が6.8mほどの離れでほぼ平行する。

内側溝SD267はA・B期共SA19塀柱穴34～36付近で途切れ，空白部の幅が南北およそ6.5m以上あり，丁度この位置がSB140推定金堂心の東にあたることと，周囲に柱穴が無いことから，棟門程度の東門が想定されるに至ったので，今年度に市道下を調査したところ，結果は推測通りであった。

確認された遺構は，SB152東門跡，SA19塀跡，SD267・268溝跡，SK1441土坑，小穴18個である。道路を挟んで北と南の地区は再発掘で，南側ではSD267溝跡とSD268溝跡を完掘し，SA19塀跡柱穴 33(調査時点では昨年の番号を踏襲し32としたが，後述するように本報告では柱穴23～35を24～36と変更した）の断割りを行った。北側地区では，SA19塀跡柱穴37を新たに確認し，柱穴38の断割りを行った。

SB152 東門跡

SA19塀跡柱穴35（南側）と36（北側）を親柱とする棟門。柱間は3.57m。東門心はS220.64m，W327.135mで，SB140推定金堂心（S217.01m，W369.42m）から42.44mで，その方向角は尼寺中軸線の4°30′に近い4°54′である。掘方の規模・形態は他の柱穴と変わらず，一度の柱抜き取り痕跡がみえ，建替えは無い。掘方平面は東西に長い方形で，35が東西1.5m，南北1m，36が東西1.3m，南北1mで，深さは確認面から共に1mほどである。埋土はローム混じりの黒褐色土で，ほぼ水平に0.1m～0.3m毎にロームの混入度合いが異なる土を互層に入れ締める。柱抜き取り痕跡は36で明瞭に観察された。痕跡によれば，柱底は掘方底面まで到達していたようで，その径は0.2mほどと推測される。抜き取り方向は東（外側）である。



第9図　SB152 東門跡(SA19 塀跡柱穴36)断面図

SA19 塀跡

柱穴31～38をあらわし，33と38を断割り，建替えの有無を検討したが，昨年度の所見に同じく建替えは無いものと確認された。

SA19塀は柱穴24から47まで東門を除くと22間確認され，柱間は一部2.2m，2.5m，3mと乱れるところもあるが，概ね約2.4mで，SA18南面塀に同じである。

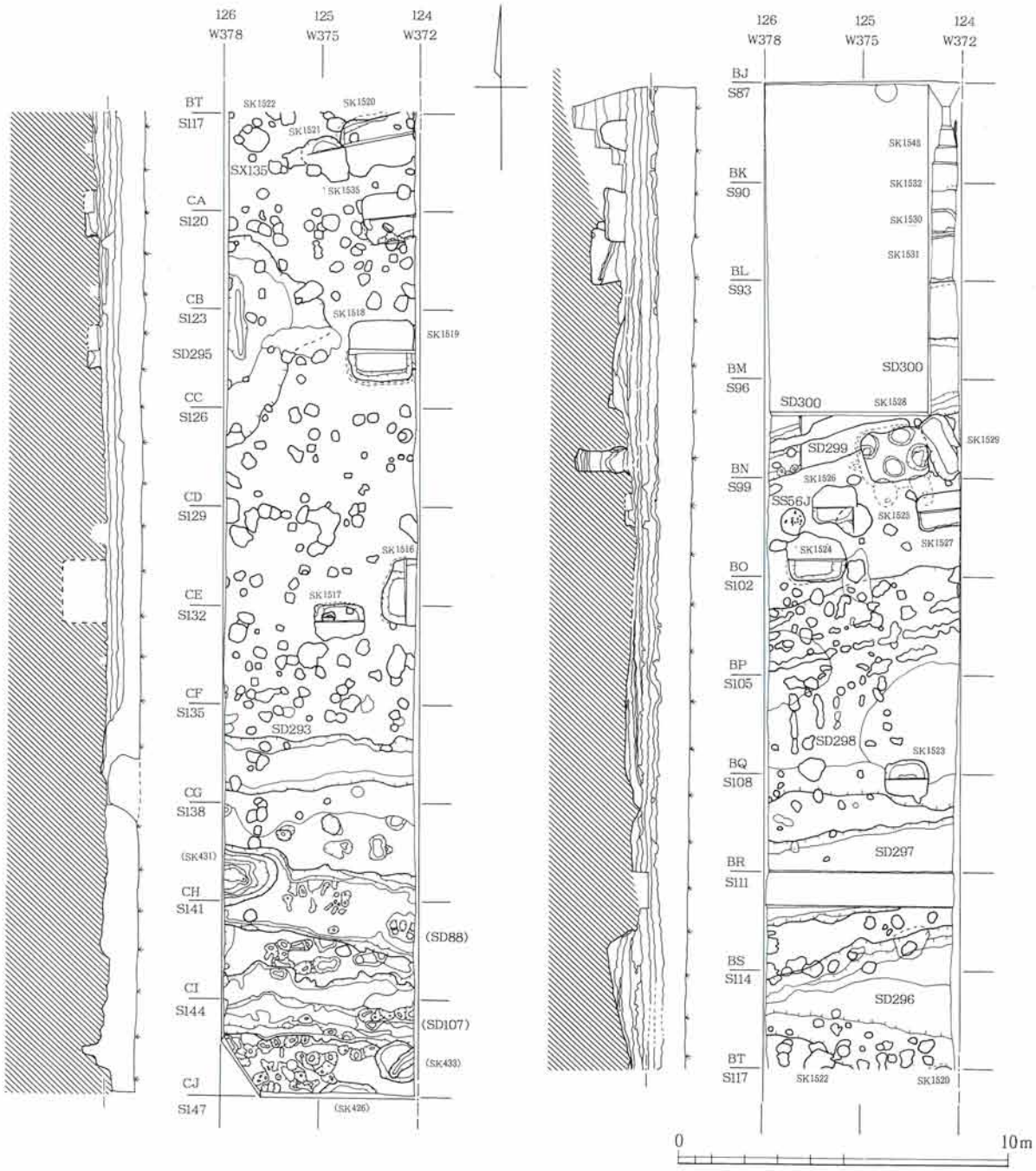
SD267・268 溝跡

内側溝SD267は塀寄りの古期（A）と離れた新期（B）の2時期がある。A期北端がSA19塀跡柱穴34掘方北端とほぼ合致し，ここで5.7m溝が途切れることが確認された。B期の北端は1.5mほど南へずれ，B期では溝の途切れは9mである。

外側溝SD268A期の北端は調査区内では検出されなかったが，壁からのボーリングで調査区北端（SA19塀跡柱穴34掘方北端にほぼ一致）から0.8mとなることが確認された。その位置から5m溝が途切れ，SB152東門跡北親柱（SA19塀跡柱穴36）掘方北端と合う位置から溝が始まる。東側の新期（B）については民有地に入り，確認できなかった。

このことにより，両溝がSB152東門跡並びにSA19塀跡に関連する遺構であることが明確となった。

溝の規模は，上面幅でSD267Ａ期が1.7m，Ｂ期が1.2m（先端狭くなる）～1.8m，SD268Ａ期が1.8m，Ｂ期が推定で約2m，深さは順に1.2m，2.2m，1.2m，1.1mである。溝の底面は一定の平坦面でなく，掘り方の粗い長さ２m～３mの土坑が連続している形態で，途切れ部の壁の立ち上がりもやや緩やかで特に変わったところは無い。溝内からは多量の瓦片が出土したが，SD267のＢ期上層に多い。この傾向は昨年確認されたもので，南面における状況と一致している。出土遺物の様相は国分寺Ⅱ期（塔再建期）以降を示しており，昨年度の調査で塀に平行するSD44溝跡の中層上面に同期の土師器甕12個体が一括して廃棄されていたことと矛盾せず，このことは中枢部区画を構成するSA18・19塀跡と直近の溝（内がSD266・267，外がSD264・268）並びに約７mの離れで平行するSD44溝跡が深く関連していることを傍証しているものと考える。また，南面と東面が共に２時期で，しかも共通した在り方をしていることは，塀の建替えに伴うものでないことを示唆しているものということが出来る。



第10図　中枢部区画北辺・寺域北辺地区全体図

4　北辺地区

中枢部区画の北辺と寺域区画の北辺の状況は，中軸線の東側のみで確認されているSA4塀跡が位置・掘方規模・柱間等から中枢部区画施設と考えられるものの，その他の状況が不明であるので，昭和54年度の第84次調査区と重複させて，寺域外北方の黒鐘谷戸にかけて南北に長大な調査区（長さ60m）を設定することとした。

トレンチの中ほどより北では以前水田であったところを宅地造成のために埋め戻した１mほどの盛土がある上に，北へいくほど黒色土が厚くなって確認面が下がり，地表から２m以上の深さとなるので，安全確保のため，壁際，幅１mの調査にとどめることとした。

確認された遺構は，SD88・107・293・295～300溝跡並びに溝状遺構，SK426・431・433・1516～1532・1535・1545土坑，SX135火葬墓，SS56集石，小穴333個である。この内，SD88・107溝跡，SK426・431・433土坑と小穴2個が過去に発掘した遺構である。

SS56集石と小穴５個は縄文時代に，SK1529土坑は古墳時代前期に，その他は中近世に位置付けられる。

SS56集石

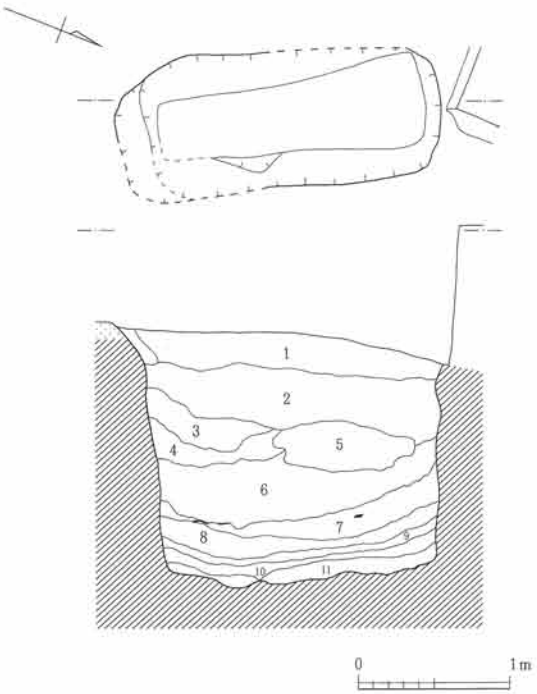
トレンチの北，BO126区にある。この付近より北へ次第にローム面が下がり，削平を免れて包含層が残存してくる。ロームの傾斜は本遺構より７m北付近で急となり，その北６mのトレンチ北端地点との比高差は1.8mある。

SS56集石は東西0.7m，南北0.9mの楕円形の範囲に焼礫が集中するもので，下部に土坑を伴うものと思われる。付近の包含層や中近世遺構内より縄文時代前期の繊維混入土器や諸磯ｂ式土器などが若干出土している。

SK1529土坑

SS56の北東，BN125区に位置する。隅丸長方形の箱型土坑で上面では南北２m，東西0.9m，底面では南北が1.8mで，東西は北端が広く0.6m，南端が0.4mと最も狭まる。坑底まで確認面（Ⅲｃ層下部）より1.7mと深い。底面は平坦で無く，最大0.2mほどの凹凸があり，全体としては中央部に向かって低くなる。

覆土の下層（６～11）は締まり強いが，上層（１～４）はやや劣る。５層は隣のSK1528土坑の張り出し部。下層はローム混入少ない黒褐色土（６・８・10）とローム多い暗黄褐色土（７・９）・暗茶褐色土（11）が互層になっており，明らかに人為的に入れ込んだものと思われる。ことに，７層の上部に周囲より堅い面が北側で観察され，この上と南側の同じ７層上面の２か所に集中して土師器壺形土器２個体がつぶれた状態で出土した。１個体はほぼ復元出来た（第12図11）が，他は小破片4点のみである。下層上面（６層上面）はほぼ平坦で，時間差をもって上層が堆積したものと看取される。上層全体からは，破片で，縄文土器や奈良平安時代の土師器・須恵器・土師質土器・男瓦・女瓦・常滑陶器甕（14世紀）が合計38点出土しており，長期間にわたって，埋没したものと考えられる。下層出土の壺形土器は，球形の胴部とくの字状に強く屈曲した頸部，櫛歯状工具による整形痕，その後の箆磨きなどから古墳時代前期（五領期）に位置付けられる。別の１個体も全く同様な特徴を示す破片である。



第11図　SK1529 土坑断面図

中近世の遺構

SD299 溝跡は確認面での幅0.8m，深さ0.4mの断面U字形の東西溝で，東が浅くなり，SK1529土坑を越えたところで東端を確認している。SK1528・1529土坑，SD300溝跡より古い。**SD300溝跡**は幅2.3m，深さ0.6mの東西溝で，底面は平坦で，立ち上がりは緩やかである。両溝共，堆積土は粘性のある黒色土を主体とする。

SD293 ・295～298は東西方向に延びる溝状遺構で，黒褐色・茶褐色・黄褐色を呈する粘性土を主とし，砂質土が部分的にみられ，水の影響を強く受けている。この層は調査区全域をも厚さ0.2m～0.3mで覆っている。SD295・296・298では擂鉢状になる部分があって，講堂・経蔵地区のSX119A～C・SX121や鐘楼地区のSX110Aなどと形態・堆積土が良く似ている。確認した面における上面最大幅と深さは，SD293が1.8m，0.1m，SD295が6.5m，0.5m，SD296が4.7m，1m，SD297が2.6m，0.4m，SD298が7.2m，0.5mである。

土坑は18基で，やや北側に集中する傾向が伺われる。断面で確認出来る範囲においては全て粘性土の下層に検出される。先の鐘楼地区における土坑分類で，A形態の「袋状土坑」とするものが，**SK1516A・B～1520・1524・1528・1531・1535A・B土坑**の9基で，B形態の隅丸長方形土坑が，**SK1521～1523・1526・1527・1530・1532土坑**の7基で，C形態の長円形（不整円形を含む）土坑がSK1525土坑の1基で，不明が**SK1545土坑**の1基である。

この中でA形態のSK1528土坑は奇異な形態の特徴を有している。即ち，土坑底面一杯を占めるように径0.6m～0.7m，深さ0.4m～0.6mの円形穴が4個間隔をおいて穿たれており，さらに南の壁下には別にやや規模の小さい2個が斜め下に向かって深さ0.8mほど穿たれていた。6個の穴には大きいロームブロックが隙間をあけて入っていた。

中近世陶器は，瓦片や土師器・須恵器などに混じって出土している。SD296溝状遺構から常滑壺（14世紀）・甕（15世紀）・甕（18世紀），在地系瓦質土鍋（15～16世紀），SK1516B土坑から在地系素焼鉢（19世紀），SK1517土坑から在地系素焼き壺(14世紀，講堂地区のSX119A不明落ち込み出土片並びに鐘楼地区のSK1474・1475土坑出土片と同一個体である)，SK1520土坑から肥前青磁碗（17世紀），SK1524土坑から常滑？壺（13世紀？），SK1529土坑から常滑甕（14世紀）などである。

土坑群は溝状遺構に先行するものと考えられるので，鐘楼地区と同じ14～15世紀代の所産ととらえて矛盾は無い。従い，溝や一部の土坑は長期にわたり開口していたものと考えられる。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物は14702点。土器類753点と瓦せん類13045点の他に，金属製品（銅製飾金具？・鉄釘・鉄滓など）15点，銭貨15点，石製品(砥石など）12点，土製品1点，板碑59点，縄文土器29点・石器（石鏃・打製石斧・スタンプ形石器・磨石・石皿・台石・礫器など）29点，礫733点，炭化物小片8点，人骨小片3点がある。ここでは，遺構出土遺物を中心に主なものを紹介するにとどめる。中近世陶器については山下守昭氏よりご教示を得た。

1　土器類

遺構出土土器類355点の内訳は，土師器坏15点，同壺44点，同甕43点，還元焔焼成須恵器坏89点，同蓋30点，同甕他13点，酸化焔焼成須恵器坏他57点，土師質土器坏9点，灰釉陶器碗他4点，中近世陶器他51点で，多くは小破片で，図示出来たのは，20個体である。

土師器（第12図）

10は北辺地区小穴出土，口径12.5cmの小型坏で，武蔵国分寺Ⅲ期前半（10世紀代）にあたる。11は北辺地区SK1529土坑下層出土の壺形土器。最大径18.5cmを計る球形に近い胴部からくの字状に強く屈曲した頸部を経て口縁部が外反して立つ。もう一度屈曲しかけたところで口縁部上段を欠く。底部は径4.2cmで，0.15cm窪む。残存器高は18.7cm。口縁部は内面が横，外面が縦，胴部は内面下半部に部分的に横，外面中ほどまで斜めに刷毛目調整をし，口縁部内面と胴部上半部はその後に箆ミガキが施される。胴部内面は横の箆ナデが全面みられる。胎土に細砂を僅かに含み，色調は赤褐色～黒褐色である。特徴から古墳時代前期（五領期）に位置付けられる。

須恵器（第12図）

国分寺Ⅰ期（創建期）に比定できるものは無く，全て国分寺Ⅱ期（塔再建期）以降のものである。坏の内1～3は還元焔焼成，4は酸化焔焼成。8の還元焔焼成坏体部外面に墨書文字が4～5文字みられ，内1字は「郷」であろうか。内面の墨痕は文字か否か不明。

土師質土器（第12図）

9は北辺地区の表土から出土。口径推定13.7cm，器高2.7cm，底径推定7.4cmの浅身の坏もしくは皿で，口辺部に径3mmの孔が1個穿たれている。底径は今少し小さく復元されるかもしれない。

中近世陶器（第12図）

講堂地区SX119A不明落ち込み出土のもの（12・14・16・18）と，鐘楼地区SX110A不明落ち込み出土のもの(13・19)を選択して掲載した。他は表土出土である。器種は皿（12），瓶子（13），捏鉢（14・16・17・19），甕（15・18），土鍋（20)で，産地は瀬戸（13・14・19），瀬戸系（12），常滑（15～18），在地系（20），時期は13世紀後半（13），14世紀前半（14），15世紀（16・19），15～16世紀（17・18・20），18世紀（15)である。

2　瓦塼類

遺構出土瓦塼類の内訳は，鐙瓦41点，宇瓦18点，男瓦3474点，女瓦3987点，堤瓦4点，塼31点，その他不明小片561点となる。遺構別に見ると，多い順に講堂地区のSX119A不明落ち込み（1772点），鐘楼地区のSK1405土坑（1467点），中枢部区画のSD267溝跡（996点），鐘楼地区のSX110A不明落ち込み（809点），中枢部区画のSD268溝跡（601点），講堂地区のSX119B（175点），鐘楼地区のSX110B不明落ち込み（158点）などで大半を占める。今回は，鐙・宇の文様瓦と文字瓦などを主に示した。

鐙瓦・宇瓦（第13図）

鐙瓦は，1がSD268溝跡，2がSX110A不明落ち込み，3・4が表土出土である。全て蓮弁に子葉の無い素弁

蓮華文で，蓮弁の数は7葉（3），8葉（2・4），15葉である。2の中房の蓮子は1＋4で，凸線により蓮弁様の輪郭線が配される。4の中房には蓮子が無い。2には南比企窯産の特徴といわれる白色針状物質が多く入る。この内，1の素弁15葉蓮華文鐙瓦は国分寺Ⅱ期（塔再建期）に位置づけられる。宇瓦は，5～7がSD267溝跡，他は全て表土出土である。均正唐草文（6・7・9・12・14・15），偏行唐草文（5・8・10），ヘラ書き文（11），格子（叩き）文（13）などで，10が創建期，6・7が再建期に比定される資料である。

文字瓦（第14～16図）

人名，郡名，郷名，その他（記号，内容不明など）の文字瓦については遺構外出土のものを含めて548点が得られた。銘記方法別にみると，押印・押型183点，ヘラ書き137点，模骨22点，朱墨書205点，その他指頭によるものなど1点である。この中から内容の明確なものなどを紹介する。

人名文字瓦は，男瓦凸面に「戸主大□（万カ）」（第14図1），同凹面に「乙万呂」（第14図2），「戸主□（宇カ）」（第14図3），「刑マ百□」（第14図4），「□呂」（第14図5），「戸主宇遅」（第14図8）のヘラ書きがある。第14図6は男瓦凹面に「□（生カ）」の墨書文字である。

郡名文字瓦は，荏原郡の押印陰刻「荏」が男瓦凸面（第14図7），女瓦凹面（第16図7），押型「荏」が女瓦凸面（第16図5）に，榛沢郡の押印陰刻「榛」が女瓦凸面（第14図9）に，豊島郡の押印陰刻「豊」が女瓦凹面（第15図1，第16図2）に，男衾郡の押印陽刻「男」が女瓦凸面（第15図3）に，陰刻「男」が女瓦凹面（第16図3）に，秩父郡の押印陰刻「父」が女瓦凹面（第15図5）に，比企郡の押印陽刻「企」が女瓦凹面（第16図4）に，大里郡の押印陽刻「大」が女瓦凹面（第15図8）に，横見郡のヘラ書き「見」が女瓦凹面（第15図4）にある。

その他の文字瓦として，女瓦凹面へのヘラ書き「大川」（第15図10）・「山口」（第16図1）・「足（足カ）」（第15図7）・「大」（第15図6）・「上」（第15図12）や，女瓦端面へのヘラ書き「＋」（第15図9・11），女瓦端面への押印「☺」（第14図10），女瓦凸面への押型「西」（第16図6），女瓦凹面への朱墨書「寺」（第14図11）などがある。なお，第15図2は粘土紐桶巻き作り技法による女瓦で，凹面に模骨痕跡を残す。

塼（第16図）

表土出土の2点を掲載した。共に長方形で，8は短辺15.8cm，長辺26.6cm，厚み5.5cmで片面に布目痕が残り，9は短辺16.1cm，長辺19.2cm以上，厚み6.9cmで，側面に幡羅郡の郡名ヘラ書き「播」がある。

3　銭貨・砥石

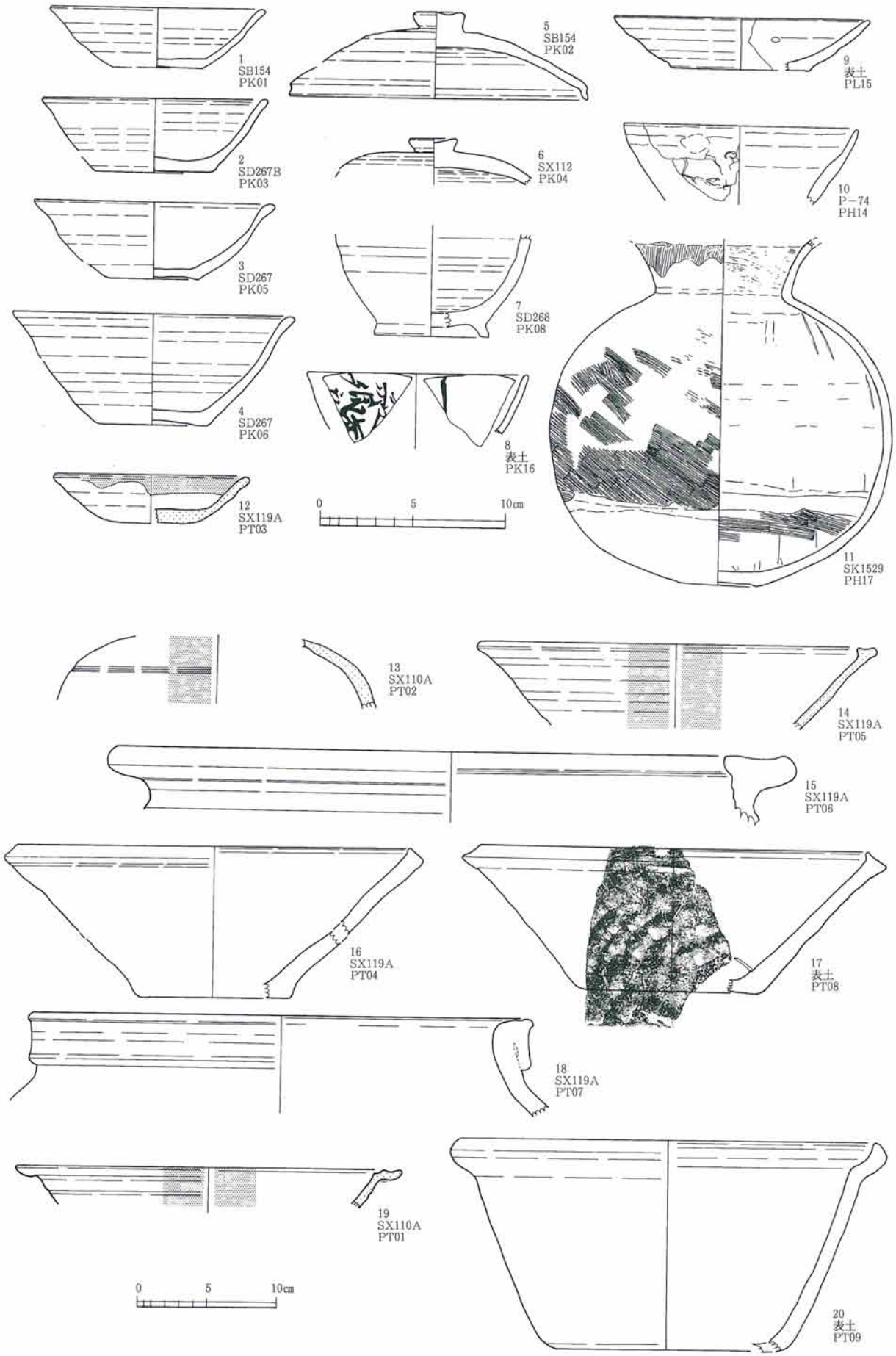
銭貨（第17図）

写真のみを掲載したMA01は北辺地区SK1516土坑，1・2は北辺地区SK1520土坑，3は同SK1521土坑，4は同SK1525・1526土坑，5は講堂地区SX119A不明落ち込み上層，6～9は鐘楼地区SX127火葬墓，10は北辺地区小穴，11は鐘楼地区表土，12・13は北辺地区表土から，それぞれ出土した。

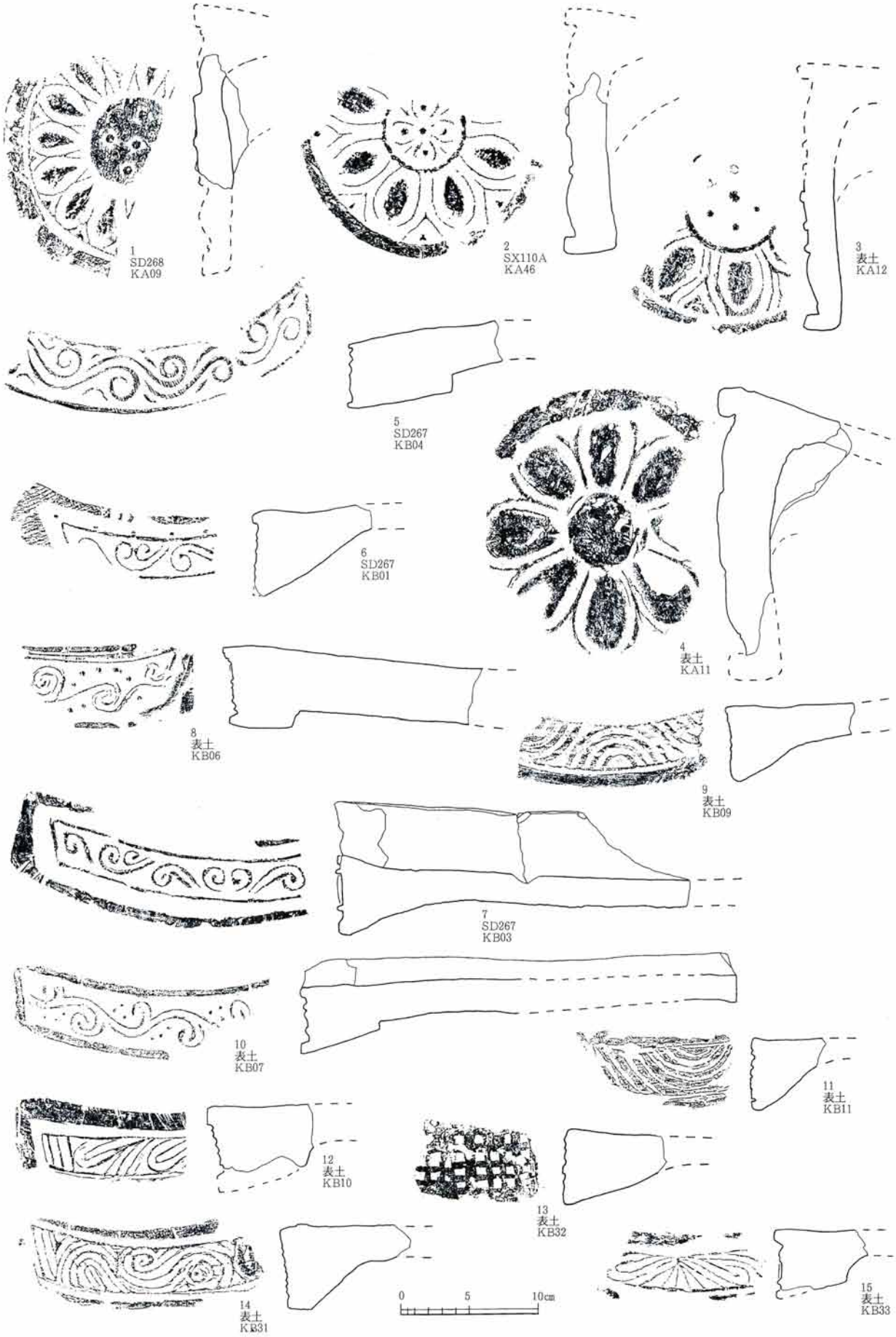
MA01・11・13は皇宋通寶（北宋，初鋳年1038，銭径25mm，MA01・13は真書，11は篆書），1は熙寧元寶（北宋，1068，24mm，篆書），2・10は元符通寶（北宋，1098，2は25mmで行書，10は23mmで篆書），3は嘉祐元寶（北宋，1056，22.4mm，真書），4は嘉祐通寶（北宋，1056，25mm，篆書），5は寛永通寶（新寛永，22mm），6は祥符元寶（北宋，1009，24mm），7は淳熙元寶（南宋，1174，23.5mm，真書・背十四），8・12は永楽通寶（明，1408，25mm），9は洪武通寶（明，1368，23mm，背一銭）。

砥石（第17図）

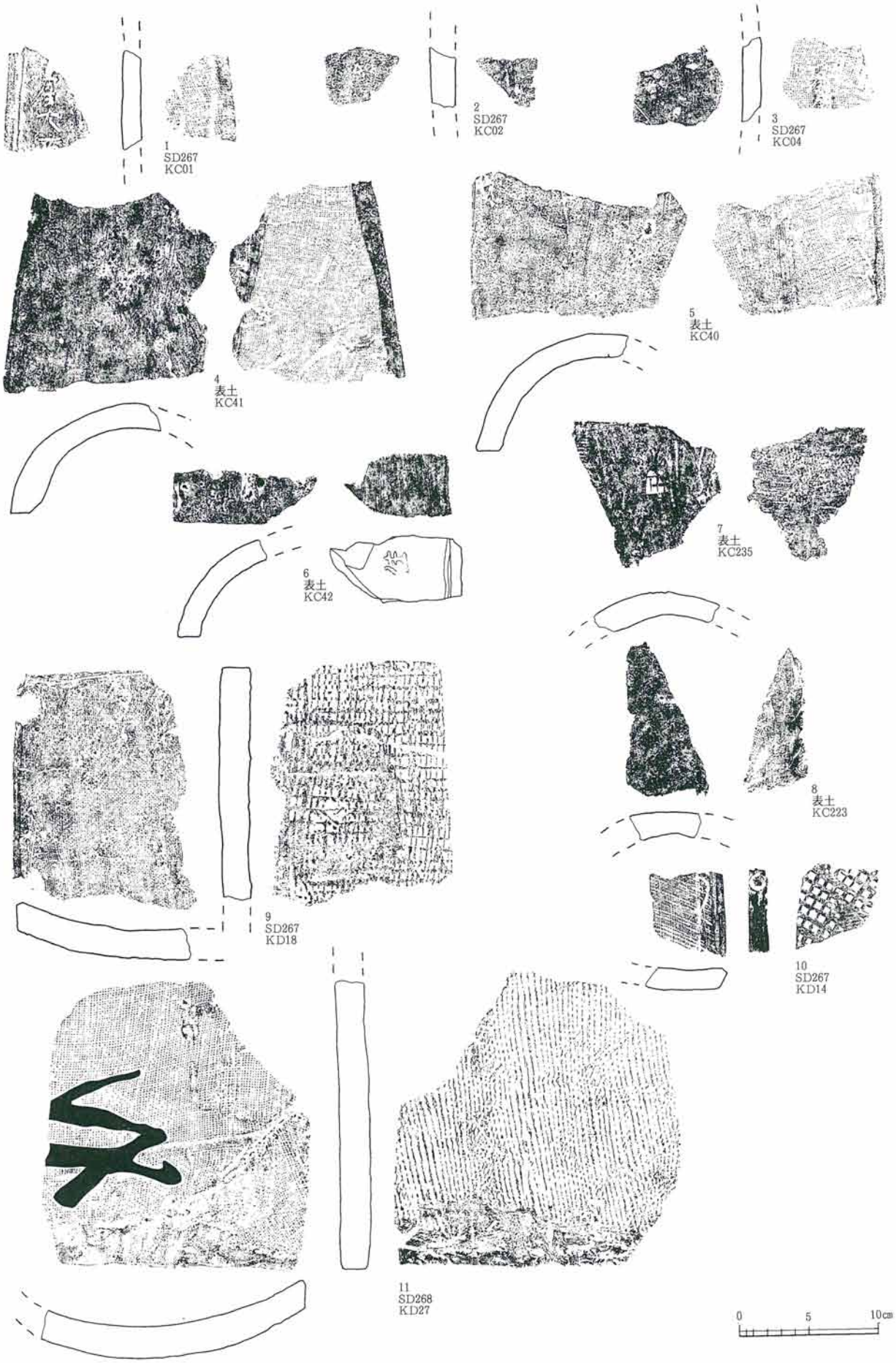
14が板状であるのを除き，直方体を基本形とする。14の砥面は他よりも顕著に目がつんでおり，仕上げ用と思われる。石材は14が粘板岩系，他は凝灰岩。1面のみ使用したもの（14・18），2面使用したもの（20），4面使用したもの（15～17・19）に分かれる。重量は14（67.5g），15（100g），16（47.5g），17（193g），18（75g），19（30g），20（147.5g）である。



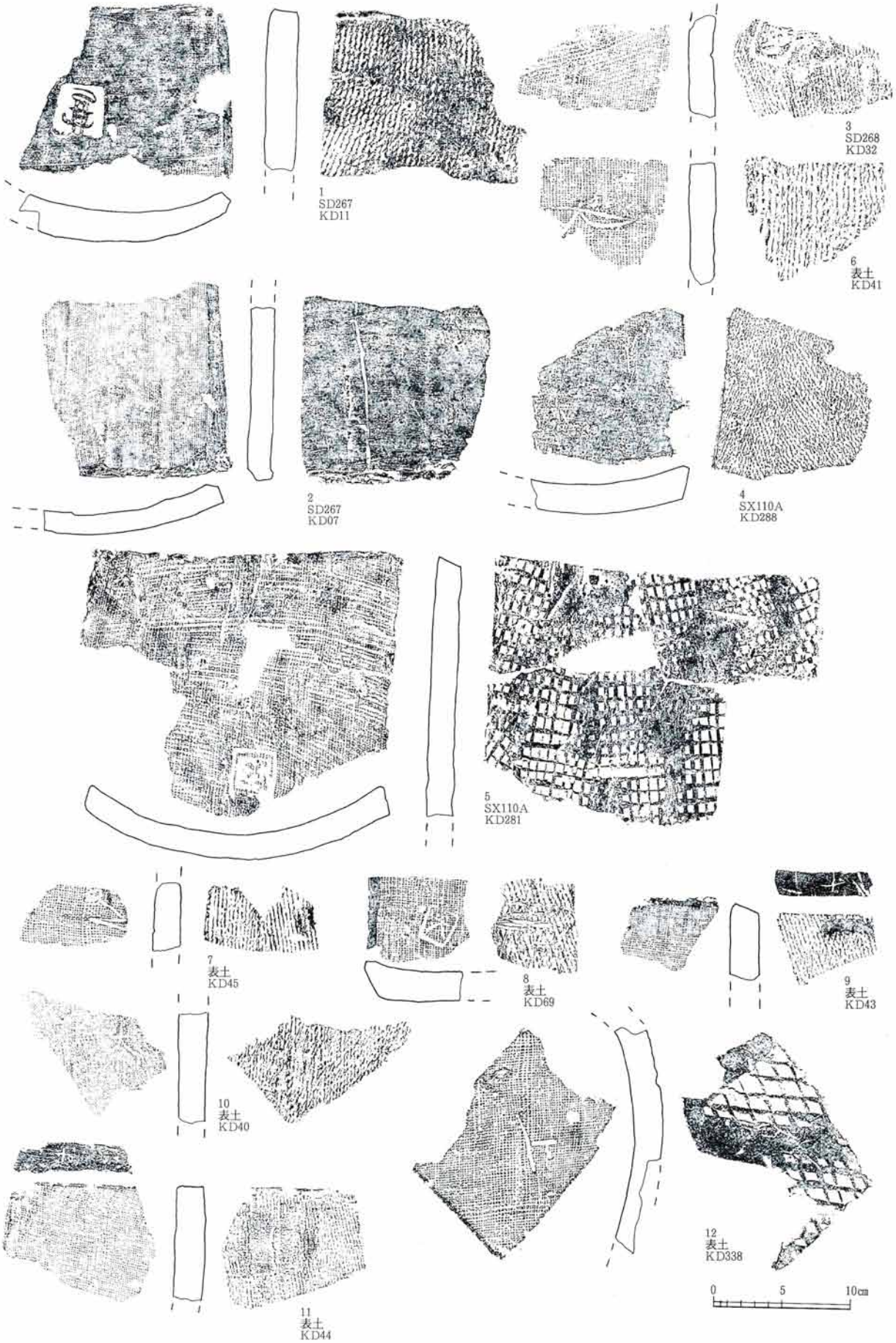
第12図　出土土器・中近世陶器実測図（1～12は1：3，13～20は1：4）



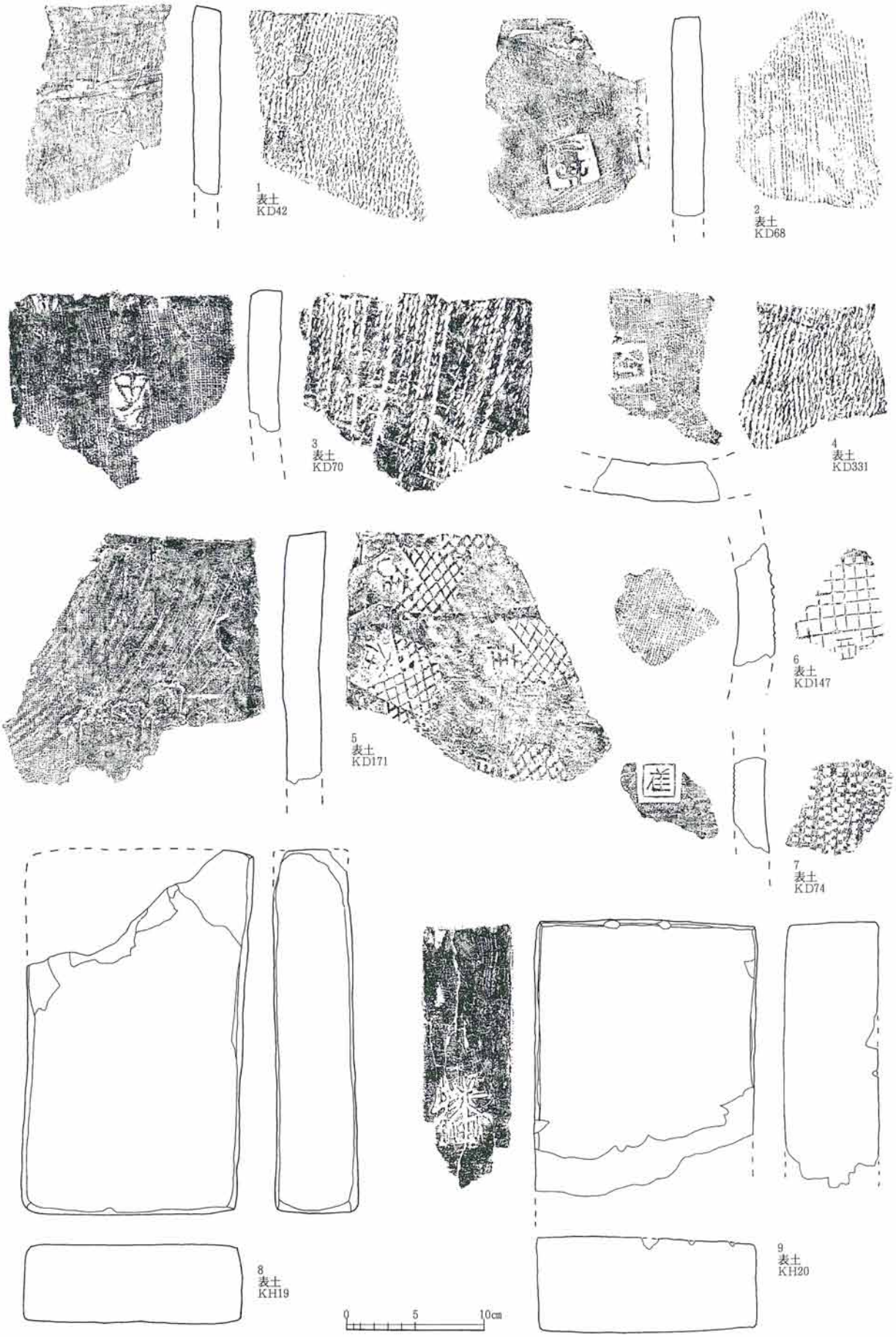
第13図　出土鐙瓦・宇瓦実測図（1：4）



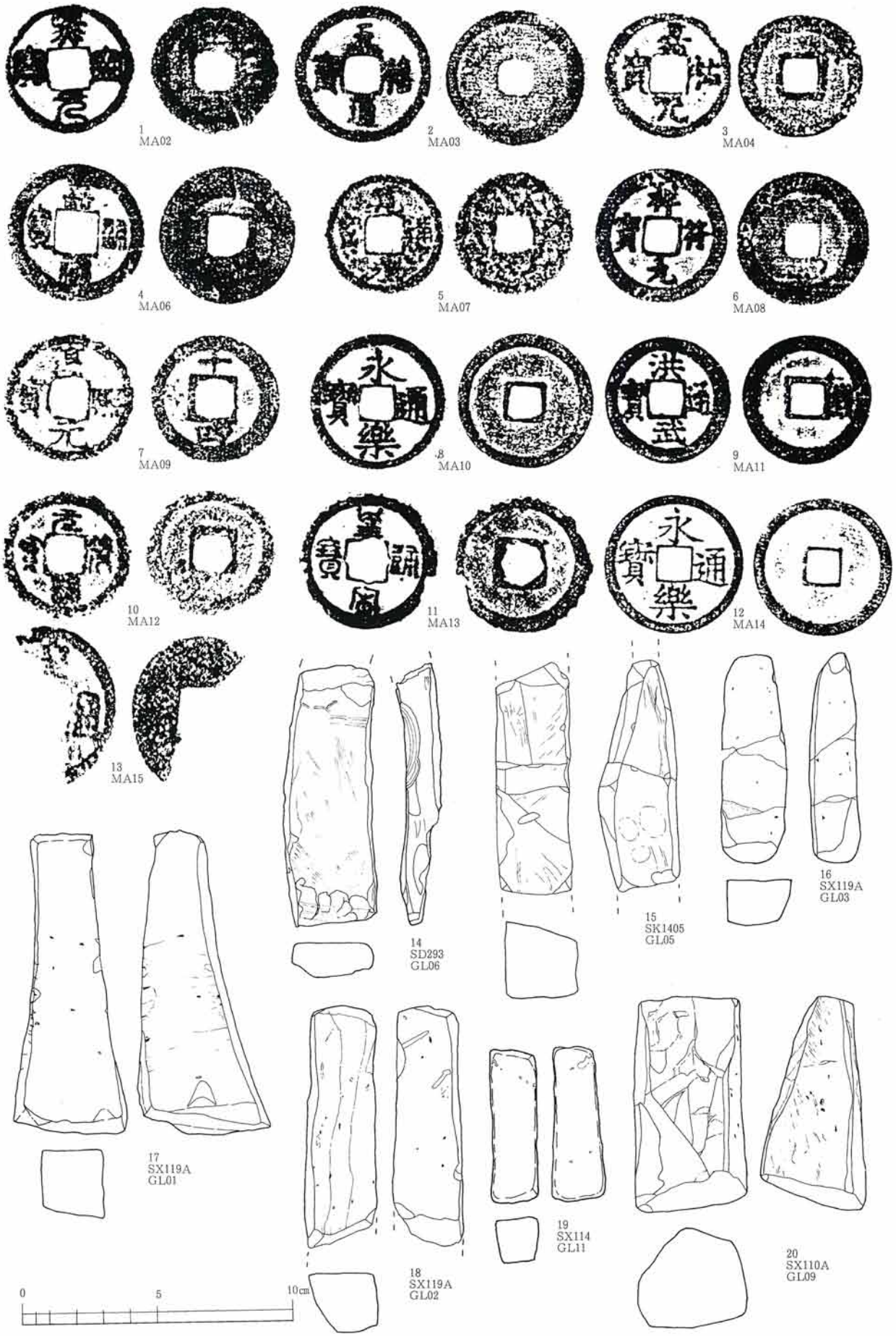
第14図　出土男瓦・女瓦（1）実測図（1：4）



第15図　出土女瓦（2）実測図（1：4）



第16図　出土女瓦（3）・塼実測図（1：4）



第17図　出土銭貨・砥石実測図（銭貨拓は実大，砥石は１：２）

Ⅳ まとめ

(1) 講堂・鐘楼・経蔵跡について

平成6年度調査の主目的は，SB140推定金堂とSB54尼坊間に想定される講堂・鐘楼・経蔵跡の検出にあったが，何等痕跡を確認出来ずに終わった。想定地全域を発掘したわけでなく，現道路下など未発掘の区域も残されているものの，痕跡が残されている可能性は少ないものと考えられる。発見出来ない要因のひとつに丁度この範囲に集中する中近世遺構による削平・攪乱があげられる。加えて，昭和30年代の土地造成による攪乱の影響も大きい。講堂の地業をSB140推定金堂掘込み地業と同程度の深さ，鐘楼・経蔵の坪掘り地業も尼坊と同程度の掘込みの深さであったと仮定すると，削平レベルからみて大部分は滅失し，僅かに残るのみと考えられるのである。さらに，僧寺講堂のように掘込み部を持たない基壇構造であったとしたら，残存している可能性は全く無いといって良い。

中枢部区画内における地割や堂の周囲に設置されたと考えられる幢竿支柱遺構の配置などをもとに，講堂等の位置を試みに想定する（第18図)。まず想定講堂は，SB140推定金堂心からSB142推定中門心までの距離49.04m，165尺をもとに，同距離の２／３の110尺（32.67m）をとって，SB140推定金堂心の北に中心を置き，基壇対角線距離を推定金堂基壇（掘込み地業範囲）間口距離26.7m（90尺)と等距離，奥行き：間口を推定金堂と同じく１：1.45として，間口74尺（21.98m)，奥行き51尺（15.15m）の規模（掘込み地業範囲）とした。想定講堂北東の幢竿支柱と推測される掘立柱遺構（SK1389・SX109・111・112）は，柱を南へ傾けて立てた穴で，４本がSB54尼坊桁行方向に並列し，その東端は尼坊東妻延長ラインと一致する。北西の掘立柱遺構（SX108・120）も同じく尼坊の方向に並列する４本の内の２本と思われ，西端は尼坊西妻延長ラインにほぼ一致する。想定講堂はこれらと抵触せず，整然とおさまる。鐘楼・経蔵は，僧寺の例にならって，規模を間口18尺（5.35m)，奥行き16尺（4.75m）とし，南妻を金堂と講堂の中央ラインに合わせ，正面間口をSB54尼坊妻延長ラインに合わせて仮に置いた。

なお，尼坊の東側で確認されたSB151A・SB151B・SB154掘立柱建物跡は埋土や出土遺物から国分寺Ⅰ期（創建期）からⅡ期（塔再建期）に存続した建物で，掘方規模からみて仮設的な建物でなく，尼坊の直近に位置して尼僧の日常生活に関連した付属建物と考えられる。僧寺同様に回廊を設けずに金講堂等と尼坊までを掘立柱塀と溝により囲繞する特異な伽藍中枢部区画の性格を考える上で重要な発見ということが出来る。

(2) 中枢部区画施設について

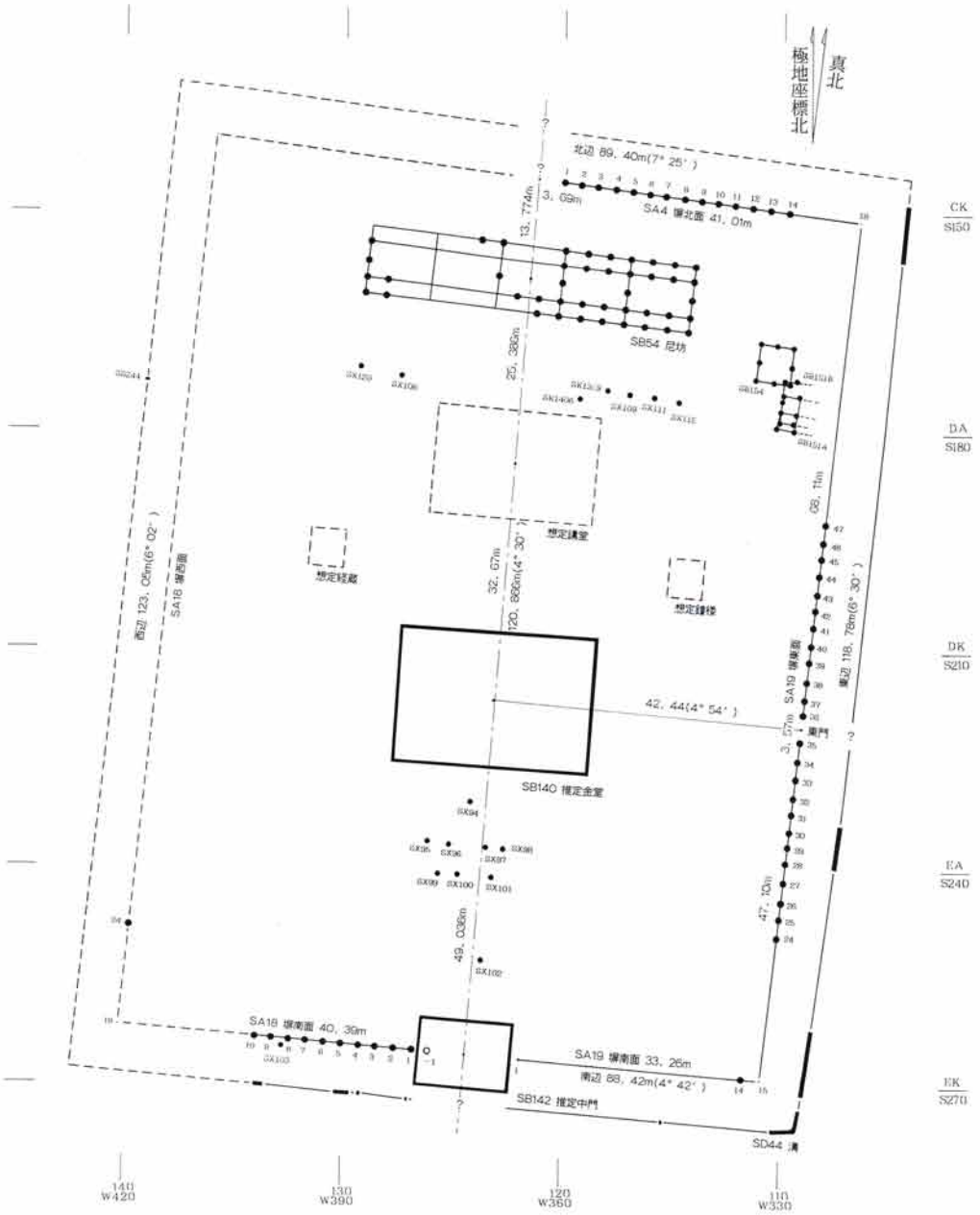
武蔵国分尼寺中枢部区画施設は掘立柱塀と６m～７m離れて外周するSD44溝で構成されるものと考えられる。塀は発見の順に北面をSA4，西面と南面西側をSA18，東面と南面東側をSA19としている。塀直近の内側溝（SD266・267)と外側溝（SD264・268）はこれまで塀に併設された溝ととらえてきたが，建替えの無い東辺においてもA・Bの２時期があること，土坑が連続した形態で掘削後，短期間で人為的に埋め戻したものと思われ，溝として開口して機能していたとは考え難いこと，推定中門と東門部分で途切れたり，北辺で内側溝が尼坊部分のみ途切れるのは利用度の少ない場所を選んで掘削した結果と推測されること，寺地・寺域溝と異なり同じ位置での掘り込みでないこと，などから南面塀及び推定中門の建替え以後における本格造営（整地，基壇築造など）に伴う所用土採取跡で，２段階に及ぶものと推測される。

今回，SA19東面塀とこれに取り付くSB152東門（棟門）を確認することが出来たので，中枢部区画全体について再考することにしたい。なお，位置，方位はやや歪みのある掘込み地業範囲や柱抜き取り痕跡による柱位置推定などから割り出した数値であり，多少の誤差を持っている。造営尺は，区画東辺復元長118.78mを400尺として求められた［１尺＝0.297m］を最も確実性のある数値として採用するが，建物辺長や心々距離などから割り出すと，1尺＝0.297m～0.298m前後の数値が得られる。

SA19南面塀東側を検討する。柱間を8尺等間として，SA18南面塀西側柱穴1～10の位置と西元町４丁目地区公

共下水道工事に伴う第143次調査（未報告）検出のSK1196土坑（検討の結果柱穴となった）をSA19塀柱穴14とみたときの位置並びにSA19塀東面柱穴24～47の位置をもとにして，南東隅柱15の位置をS269.202m，W332.671mと割り出すと，南面東側は14間，33.26m（112尺）と復元される。この結果，SB142推定中門心はS265.90m，W 373.18m，四隅は北東隅S261.82m，W366.55m，南東隅S271.00m，W367.30m，南西隅S269.98m，W379.82m，北西隅S260.80m，W379.07m，中門心・SB140推定金堂心間距離49.036m，掘込み地業規模東西12.6m，南北9.2mと修正される。この結果，SA18・19南面塀と中門の方向も，東偏4°40′へ修正され，ほぼ中軸線に直交することが明らかとなった。

SA19東面塀については，平成5年度において柱穴22個（旧23～32，37～47）を確認し柱間を約2.4m等間として番号を付し，若干合わないところを柱穴15～22間の柱間を2.5mとみて帳尻を合わせていたが，今年度の調査によって柱間12尺（実測3.57m）の東門（SA19塀柱穴35・36）が金堂心東延長に位置することが判ったので，昨年の報告で23～32とした柱穴は24～33と変更されることとなった。南東隅柱15からSB152東門南柱（SA19塀



第18図　武蔵国分尼寺跡中枢部建物配置図（●は確認された柱位置，SB54尼坊においては礎石据付掘方）

柱穴35）間の距離は計算上47.10m，158.5尺強となり，８尺等間の20間をとると160尺となって2.5尺強足りない。単位寸尺の誤差でなければ施工段階での調整が行われたものと推測される。SB152東門北柱（SA19塀柱穴36）より北へは11間分を確認し得たのみで，これより北側はＪＲ武蔵野線高架にかかり追及することは出来ないが，計算では北東隅柱まで68.11m，229尺強となり，８尺等間の29間をとると232尺となって３尺弱ほど足りない。こちらは，尼坊東の付属建物（SB154掘立柱建物）近くに12尺ほどの棟門が取り付く可能性がある。

SA4北面塀東側は中軸線より3.69mの位置から13間分を確認済みで，その東側はＪＲ武蔵野線高架に入り，西側は近世以降と考えられる溝状遺構により滅失している。北東隅柱18の位置は，SA19東面塀方向をもとにすると，S151.19m，W319.23mと割り出され，北面塀東側は41.01m，138尺と復元され，８尺等間の17間をとると136尺となって２尺ほど余る。中軸線より北東隅柱18までは41.01m＋3.68m＝44.69m，150.5尺となる。なお，中軸線上の交点に北門があるとすれば，SA4柱穴１の位置からみて，その間口は7.38m(25尺弱）以内と推測される。次に，SA18塀はSB142推定中門の西へ延びて南面と西面を画する。平成４年度調査で９間分を検出し，さらに５年度の再調査でSB142推定中門掘込み地業下において塀１期目の柱穴を検出して，門の建替えにあわせて塀が建替えられたことを明らかにした。西辺の手掛かりとしては，第143次調査検出のSB104掘立柱建物柱穴が位置と掘方形態・規模などからSA18塀柱穴24に該当するものと推定出来ること，SD244南北溝が位置や規模からSD44溝につながり，その東側６m～７m前後にSA18西面塀が位置するものと推定出来ることがあげられる。そこで，SA18南面塀（建替え後）を8尺等間で17間分とり，SA4北面塀長を中軸線より北東隅柱18までの距離44.70mの２倍をとって89.40mとし，両隅を結んで西辺を想定すると，南西隅柱18の位置はS262.021m，W420.799m，北西隅柱位置はS139.651m，W407.874mと割り出され，西面塀長は123.05m，414尺強と復元される。８尺等間の52間をとると416尺となって２尺足りないが，門が付くことも考えられるので解釈を保留しておきたい。

このようにして中枢部区画は，南辺長88.42m(298尺，僧寺伽藍中軸線に対して４°40′東偏)，北辺長89.40m(301尺，同じく７°25′東偏)，東辺長118.78m（400尺，６°30′東偏)，西辺長123.05m（414尺強，６°02′東偏）と復元され，東西89.1m(300尺)，南北118.8m（400尺）を計画長とする矩形を想定することが出来た。塀に伴っては６m～７m離れてSD44小溝が外周を巡るものと思われるが，北辺については今次調査でも確認出来なかった。塀掘方より浅い溝ゆえに中近世における削平により失われたものと思われる。寺域北辺を画する溝も同様に今回のトレンチ内でも確認できなかった。こちらは，ローム層を深く掘込んだ溝であることから全く削平されてしまったとは考え難く，寺域北辺区画施設については今後の課題としたい。

今回確認された中枢部区画東辺東門も極地座標北（僧寺伽藍中軸線）に対して東偏4°30′の尼寺伽藍中軸線に合致して配置されている。従って，尼坊の棟方位を除く主要建物の配置と方向並びに中枢部区画南面塀は個々に若干のばらつきはあるものの尼寺伽藍中軸線に従うものということが出来る。対して，南面塀を除く中枢部区画は６°02′～７°25′東偏しており，尼寺伽藍中軸線と２°～３°前後の相違があり，南面における左右非対称の結果を生じさせている。これは，僧寺の方位により近い伽藍中軸線と主要建物の配置を計画した上で，中門と南面塀・金堂の築造を優先させつつ，順次全体工事の実施に及んだことが原因となったと考えられる。なお，金堂基壇北縁を中枢部区画のほぼ中心に位置させる点は僧寺と共通する。

(3) その他の時代の遺構について

縄文時代の遺構・遺物は北辺地区のトレンチ北端において確認された。集石と前期の繊維混入土器や諸磯ｂ式などである。付近では，北西200mほどの武蔵台遺跡第３次調査地点（都立府中病院内遺跡調査団1995『武蔵国分寺跡西方地区　武蔵台遺跡Ⅱ　―資料編３―』）において黒鐘谷谷頭の埋没谷から集中して前期後半の土器が出土しており関連性が考えられる。

古墳時代前期（五領期）の土坑と土師器壺形土器が同じく北辺地区トレンチ北端で発見された。丁度この地点から北東へ20m～30mほどの黒鐘谷の谷底低地において同期の土師器甕形土器1個体が単独で出土している。また，

同じ黒鐘谷を200mほど入った谷頭の谷底低地において長方形土坑と台付甕が出土している（都営川越道住宅遺跡調査団1995『武蔵台東遺跡発掘調査概報５』）。上面短辺1.6m，底面0.6m，上面長辺2.5m，底面2.1m，深さ2.6mの土坑で，掘方ととらえられた底面の凹凸は激しく，また覆土は人為的埋め戻しによるものとされる。土器は上部より数片に割れて出土した。規模・形態や堆積土などにおいて今回検出のSK1529土坑と共通する点が多い。

野川最下流においては世田谷区堂ヶ谷戸遺跡や総合運動場遺跡などの大規模集落があるものの，中流域ではまばらで，上流域では武蔵野公園低湿地遺跡において同期の丸木橋状遺構が検出されて，古墳時代前期の開発が低湿地利用（水田耕作）を目的に下流域から上流域へと進んだものと考えられている（武蔵野公園泥炭層遺跡調査会1984『武蔵野公園低湿地遺跡』）。本地域においては，生産，あるいは居住に関係した遺構・遺物の検出をみておらず，源流域の谷頭に立地したありかたから，水に関連した特殊な遺構である可能性をあげることが出来る。

黒鐘谷における縄文，古墳時代の様相については表土が厚く確認面が深いことなどから調査事例が少ないが，今後は最も注視すべき地域ということができる。

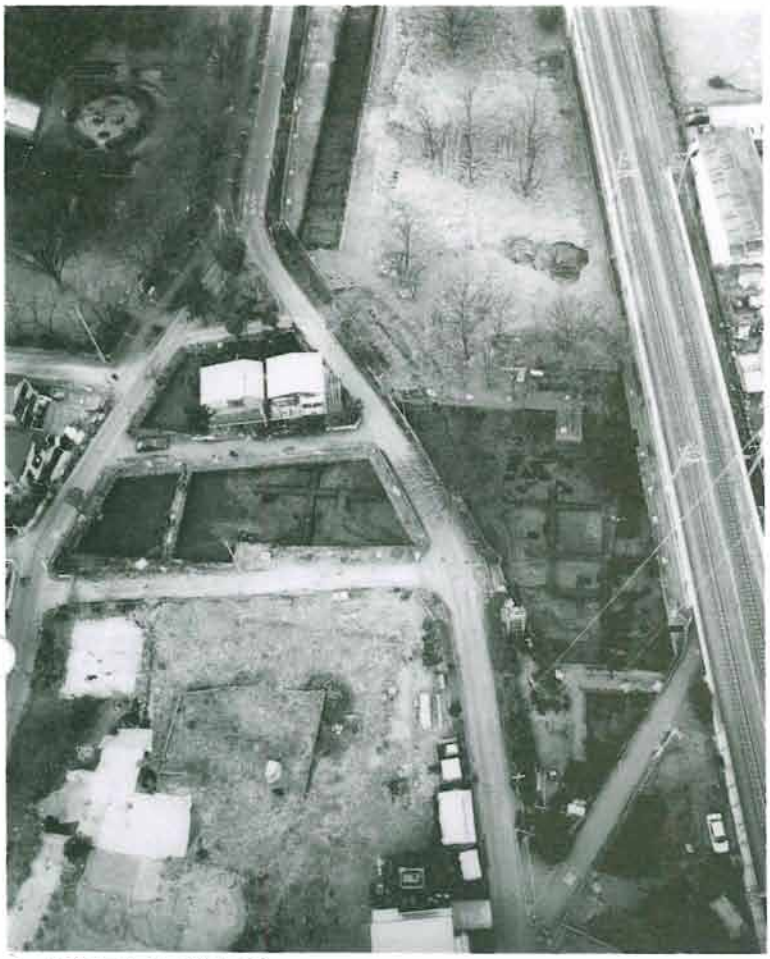
次に，中世遺構ととらえられる地下式横穴・土坑・溝跡・不明落ち込み・火葬墓などについてであるが，14～15世紀代の所産ととらえた土坑群の内，Ａ形態とした「袋状土坑」は，今回講堂・鐘楼・経蔵想定地周辺で24基，北辺地区で９基の多きを確認した。平成４年度調査でもSB140推定金堂跡の基壇地業を切って２基，周囲に３基を検出している他，５年度調査でSB54尼坊の中央房の礎石据付掘方を切って４基が検出されている。これら土坑群は火葬墓や地下式横穴，不明落ち込みとした擂鉢状の窪みなどと関連するものと思われ，寺域西方の第83次調査区（1989『武蔵国分寺跡発掘調査概報ＸⅣ』）では，Ａ形態の土坑１基を含む土坑群（土坑の中には中近世陶磁器を多量に出土するものあり）にまじって地下式横穴２基が集中している。

地下式横穴は地下式坑などとも呼ばれ，墳墓と貯蔵施設の２説があり，最近の人骨検出例などから前者が有力であるが，伴出遺物が無い例では機能・時期を特定することは難しい。地下式横穴墓あるいは地下式壙の名称を用いる墳墓説では，「地下式壙とは，地平面下に竪坑を掘り下げてこれを入口部とし，さらに竪坑下部から横へ掘り下げて本体である地下室を築いた遺構で，中世初頭に発生し中世末期には終末を迎えた中世仏教の影響を受けた広い意味での遺体埋葬施設＝墓」（高尾栄一1991「第３節　中世の葬地－段切り状遺構　Ⅵ．地下式壙」『五段田遺跡Ⅱ』五段田遺跡調査会発行）などと定義している。

千葉県市原市台遺跡の中世遺構群は墓地で，溝（道路跡）や人為的な窪み（浅い削平や擂鉢形・円形・方形の掘込み）などで区画された範囲に地下式壙や掘立柱建物跡・土壙などが「群」を構成し，各々が複合的に機能していたとされる（半田堅三1993「地下式壙再考」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』）。また，東京都板橋区五段田遺跡の段切り状遺構は15世紀から16世紀前半に位置付ける地下式壙（土葬による改葬墓とみる）を中心に土壙墓・火葬址・溝・道状遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物跡などで構成される墓域と考察している（高尾栄一1991）

今回，検出されたSX119Ａ・ＢやSX110B不明落ち込みは明らかに人為的な擂鉢状の窪みで，SX119B西端にはSK1435地下式横穴が位置し（付随したか否か不明），SX110AにはSX114・134地下式横穴（同時にあったか否かは不明）が付随することや，火葬墓・土坑群の分布と重なることなどの状況は台遺跡や五段田遺跡などと類似していることが指摘出来る。

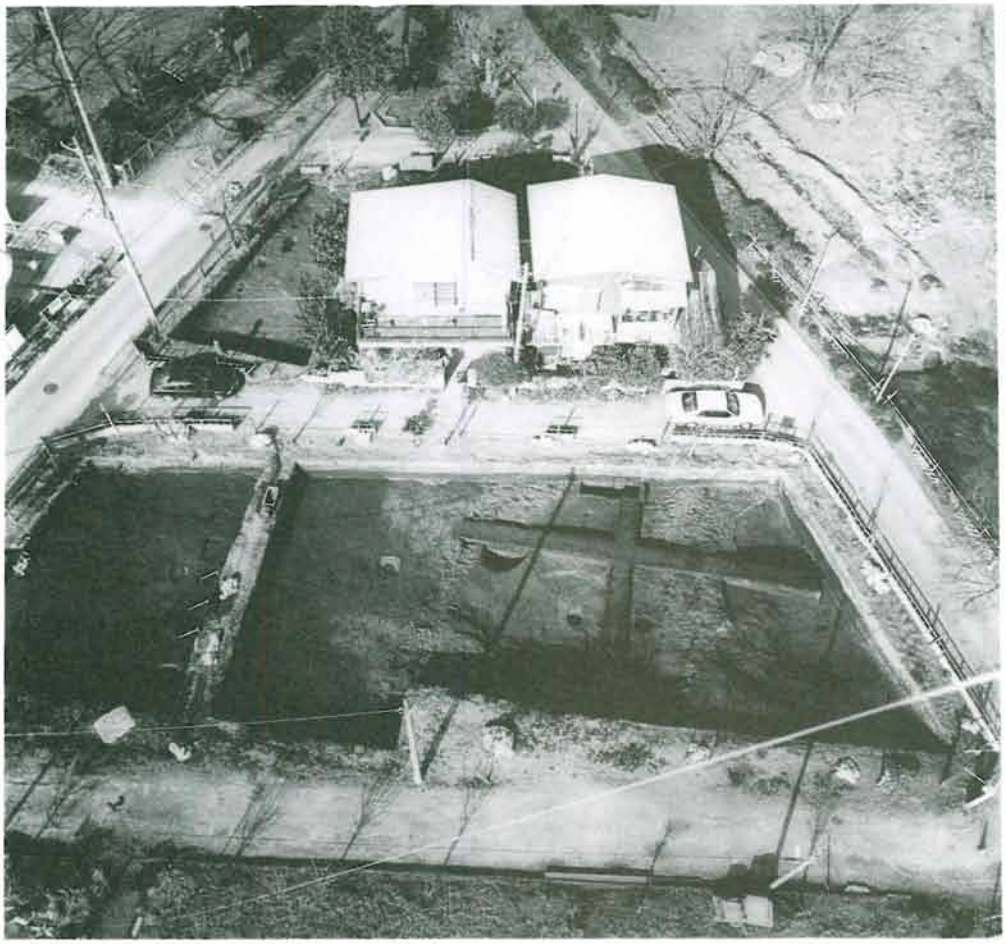
これら中世遺構群は鎌倉街道跡に沿った台地下に分布しており，他地区には見られないことからも中世後期の所産としてほぼ誤りがないものと考える。付近一帯は，元弘３(1333)年，上野国で挙兵した新田義貞軍と鎌倉幕府軍との戦いの戦場となり，寺の縁起はそのひとつの分倍河原合戦で国分寺の七堂伽藍が焼失したことを伝えている。また，縁起によれば，翌建武元(1334)年に新田義貞から黄金三百両などの寄進があり，同２（1335）年に薬師堂一宇が再建されている。中世後期の再興国分寺の活況は，尼寺跡地区を含め僧寺跡一帯より出土資料が急増することからも伺え，本地域の中世遺構群は再興国分寺や尼寺北方台地上の伝祥応寺跡・塚，鎌倉街道跡などの遺跡との関連を複合的にとらえていく必要がある。



1．調査区全景（南から）

3．SX120 東西土層断面（南から）

4．SX119A 遺物出土状況（西から）

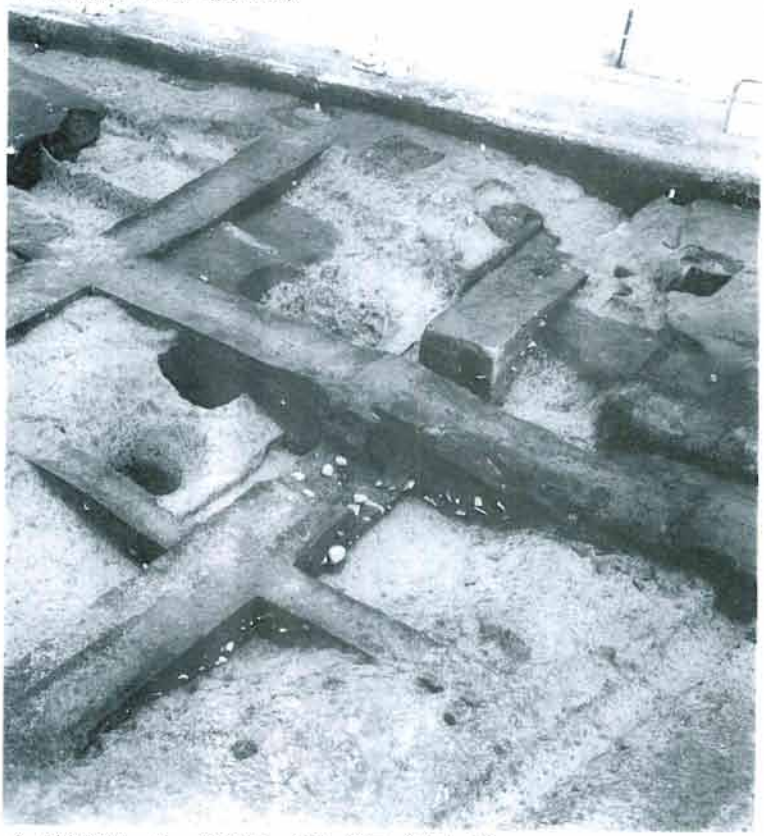


2．講堂・経蔵地区全景（南から）

5．SF 3 道路跡（南から）

図版 2

1．鐘楼地区全景（南から）

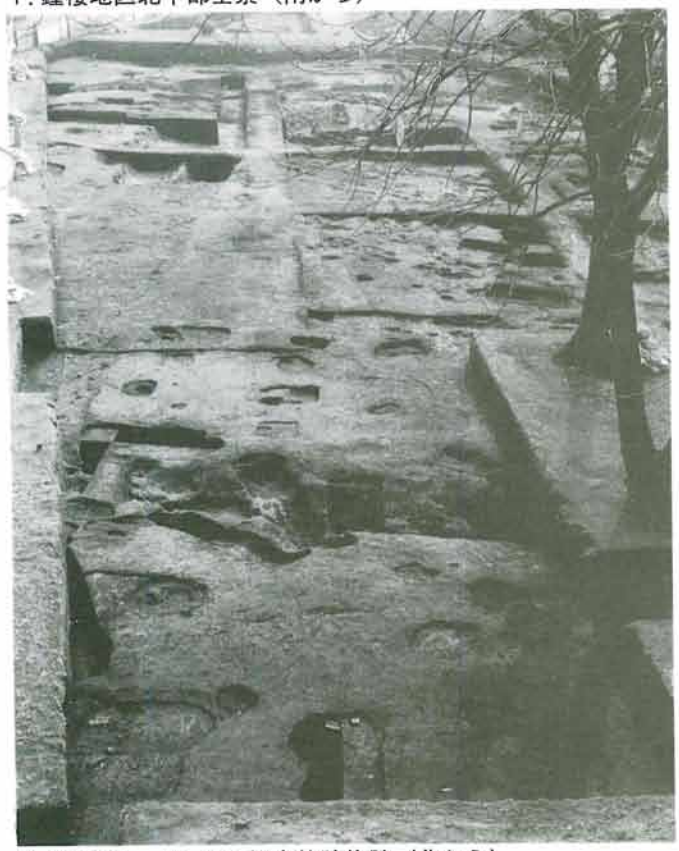


2．SX110A・B ・SX114・134 全景（南から）

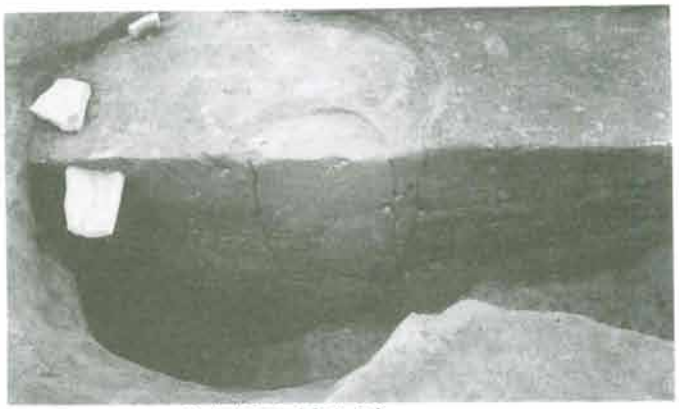
3．SX134 竪坑部（南から）

4．SK1503 土坑（東から）

1．鐘楼地区北半部全景（南から）



2．SB151A・B・154 掘立柱建物跡（北から）



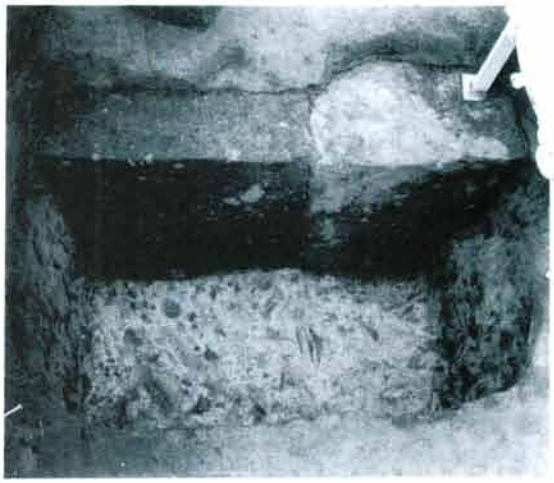
3．SB154 2−3 柱穴断面（東から）

4．SX109 掘立柱遺構断面（西から）

図版 4

1．東門地区全景（南西から）

2．SB152 東門跡（東から）

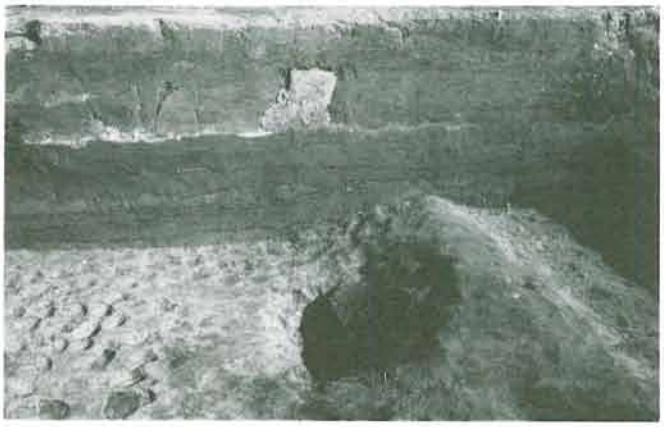


3．柱穴 36 断面（南から）

1．北辺地区全景（北から）

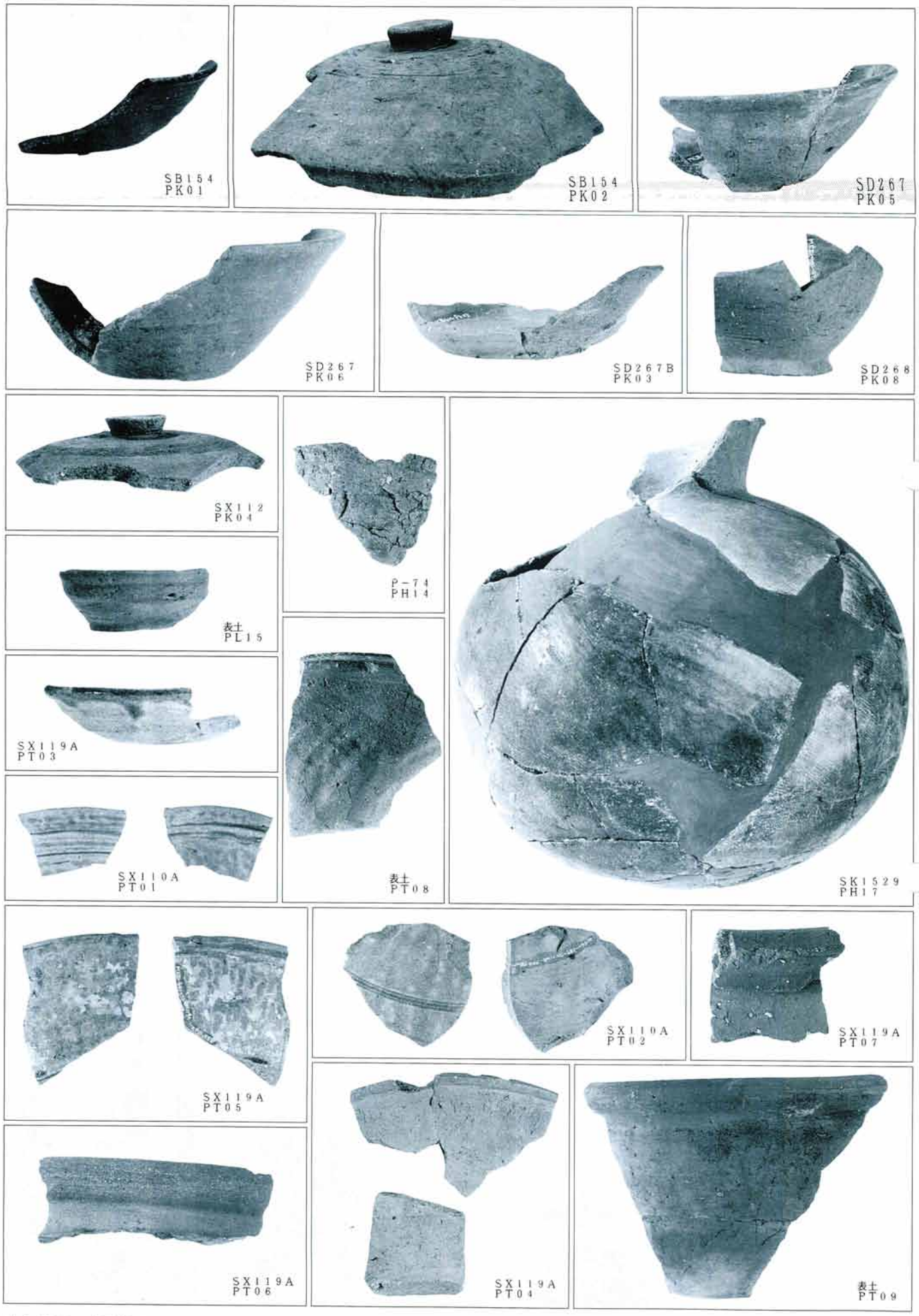
2．SK1529 上杭全景（北から）

3．SK1529 土坑土師器壺出土状況（北から）



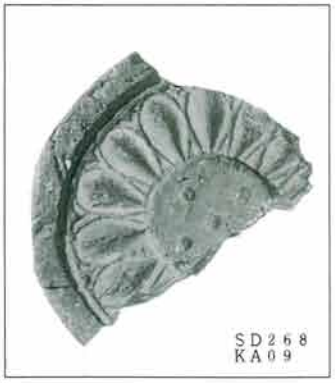
4．SD298 溝状遺構断面（部分）（西から）

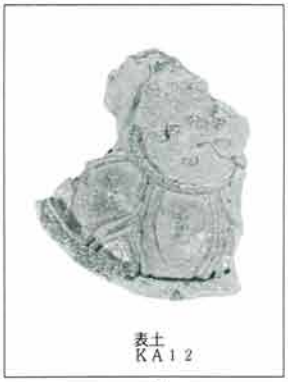
図版 6



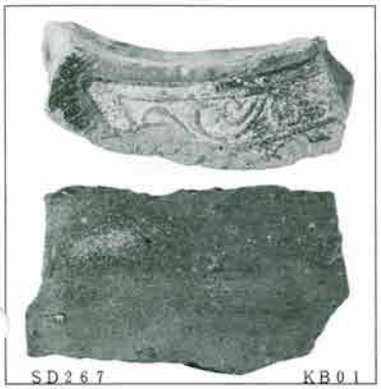
出土土器・中近世陶器（土器・PTO 3 は 1 ： 2， 中近世陶器は 1 ： 3）

表土
KA11


SD268
KA09


表土
KA12

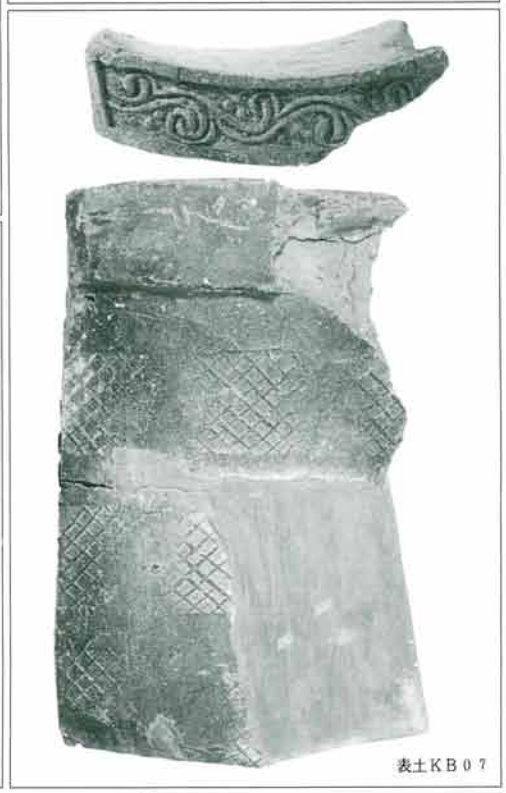
SX110A
KA46

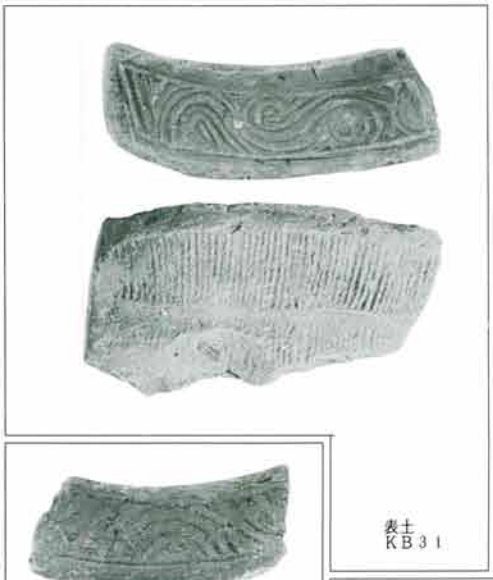

SD267
KB01

SD267
KB03

SD267
KB04

表土
KB06


表土KB07

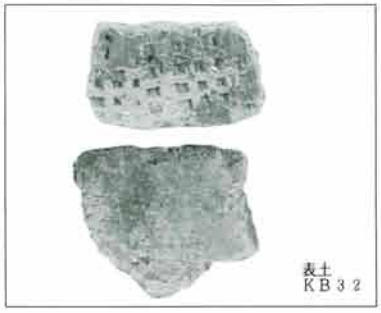

表土
KB31

表土KB10

表土
KB09

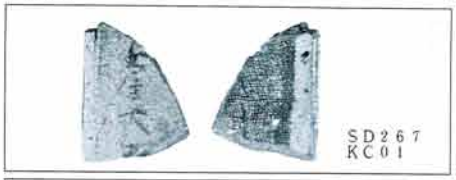
表土
KB11

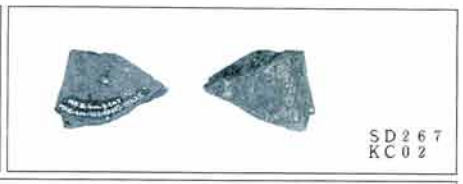
表土
KB33

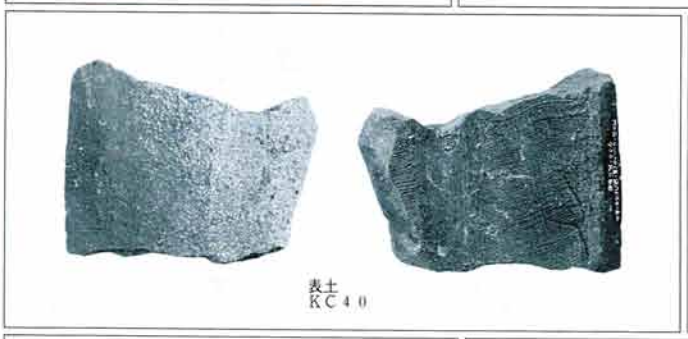

表土
KB32

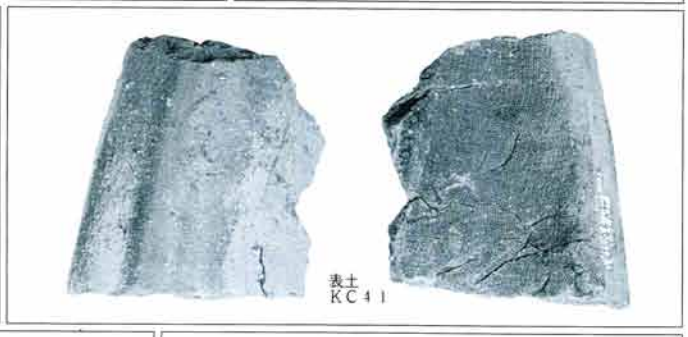
出土鐙瓦・宇瓦（1：4）

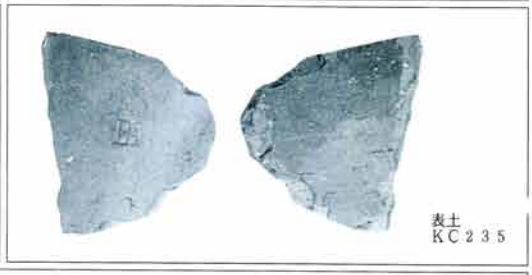
図版 8

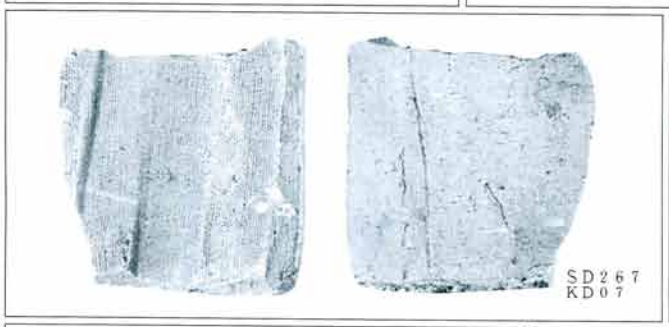


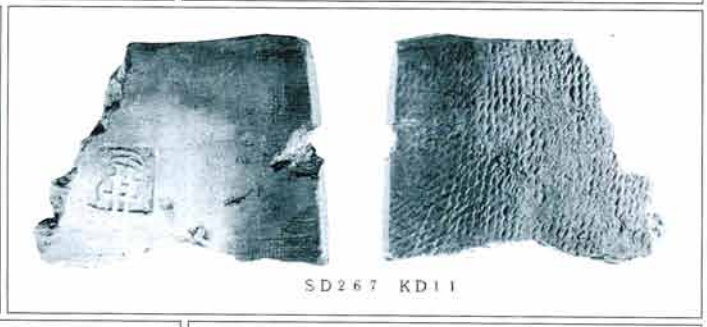


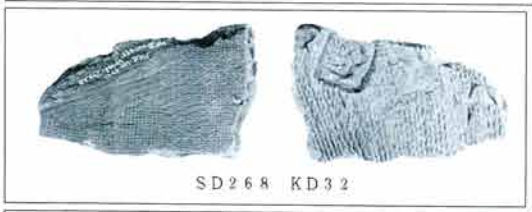


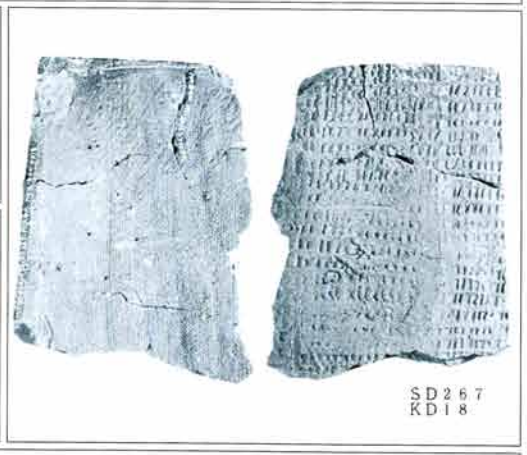


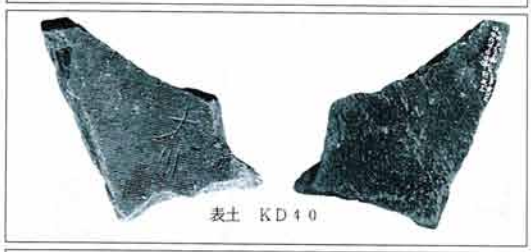


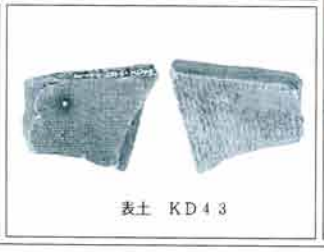


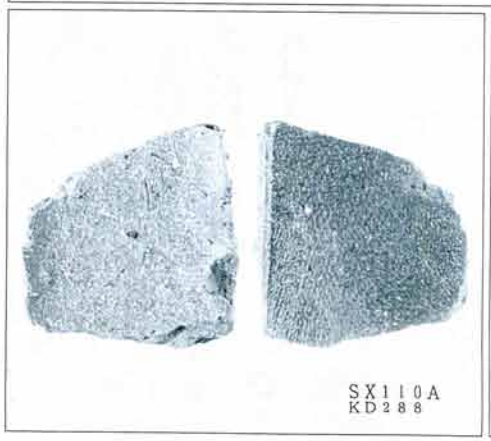


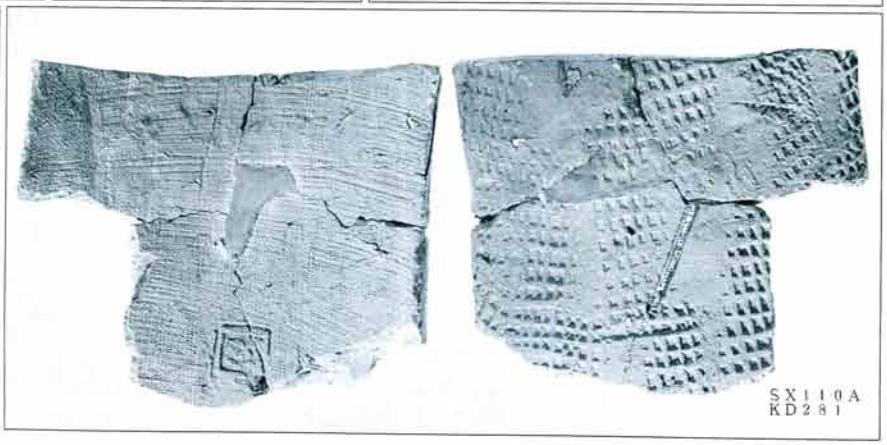




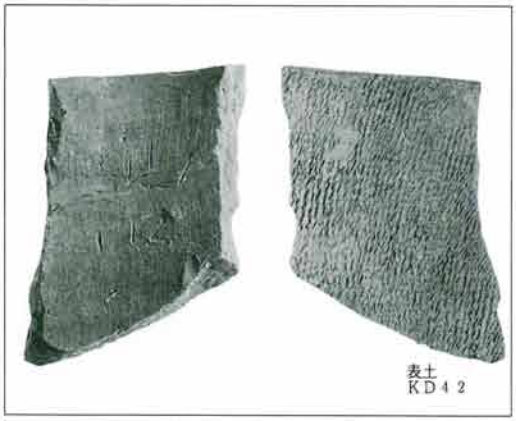




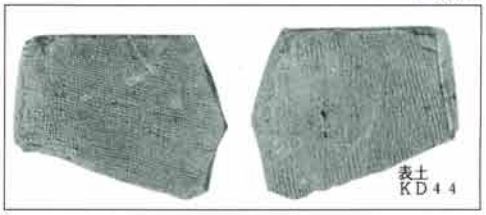




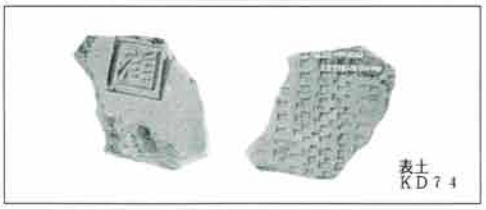
出土男瓦・女瓦（1：4）

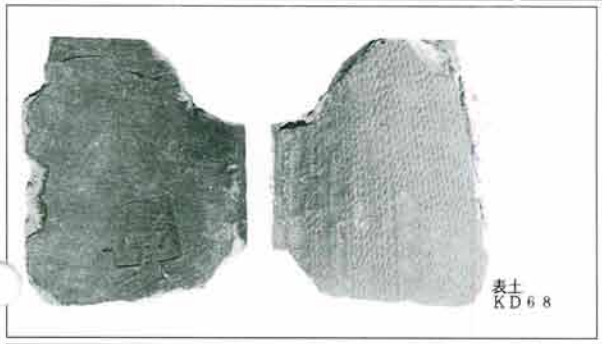

表土
KD42

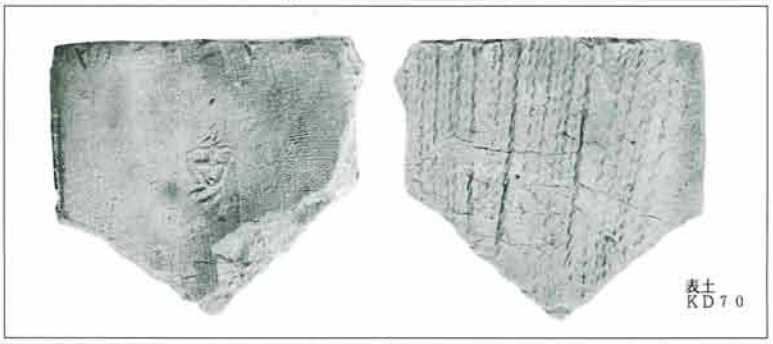
表土
KD45

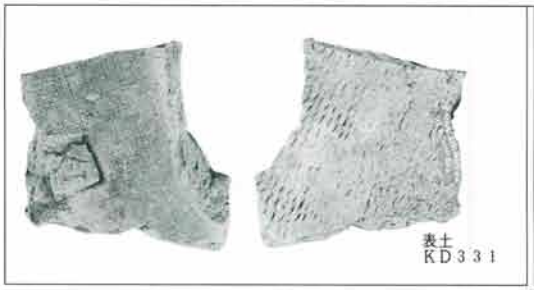

表土
KD44

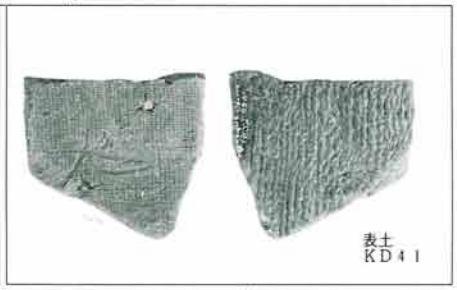
表土
KD69

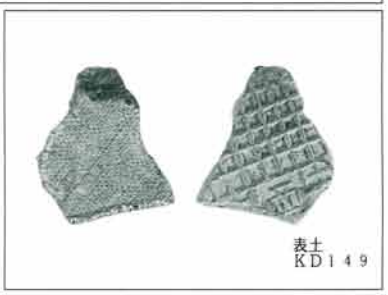

表土
KD74

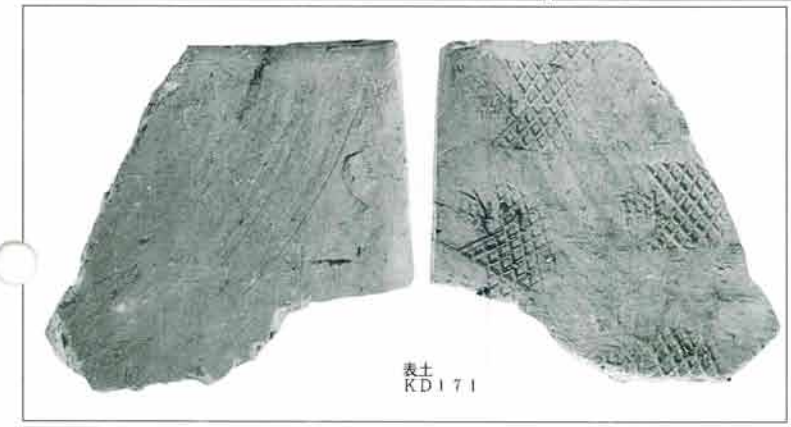

表土
KD68

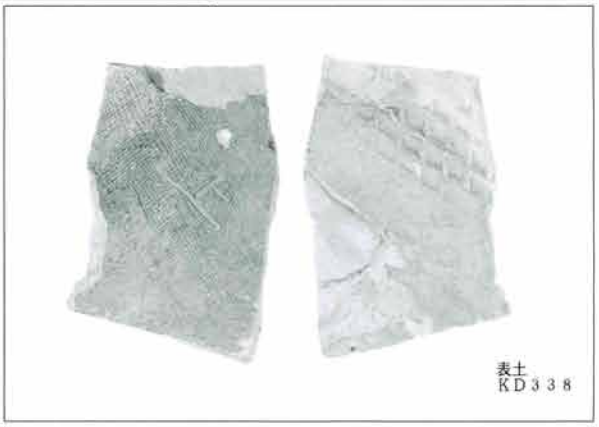

表土
KD70

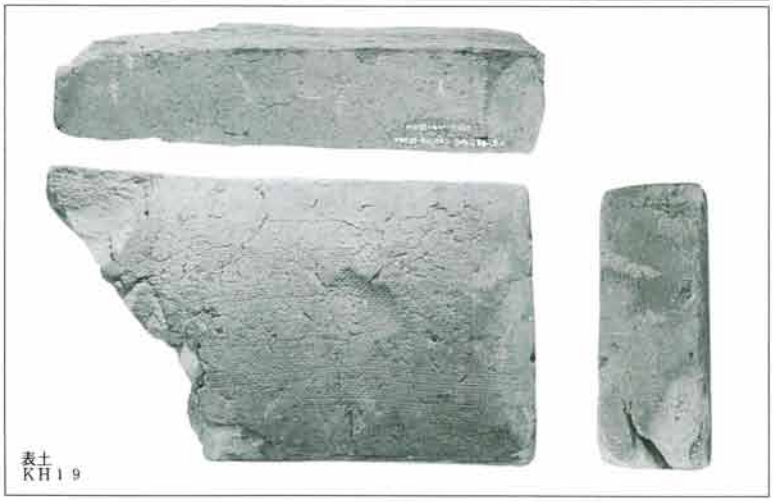

表土
KD331

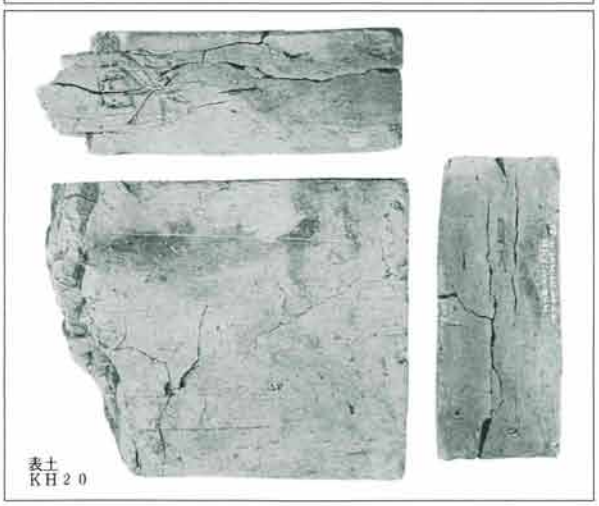

表土
KD41


表土
KD149


表土
KD171

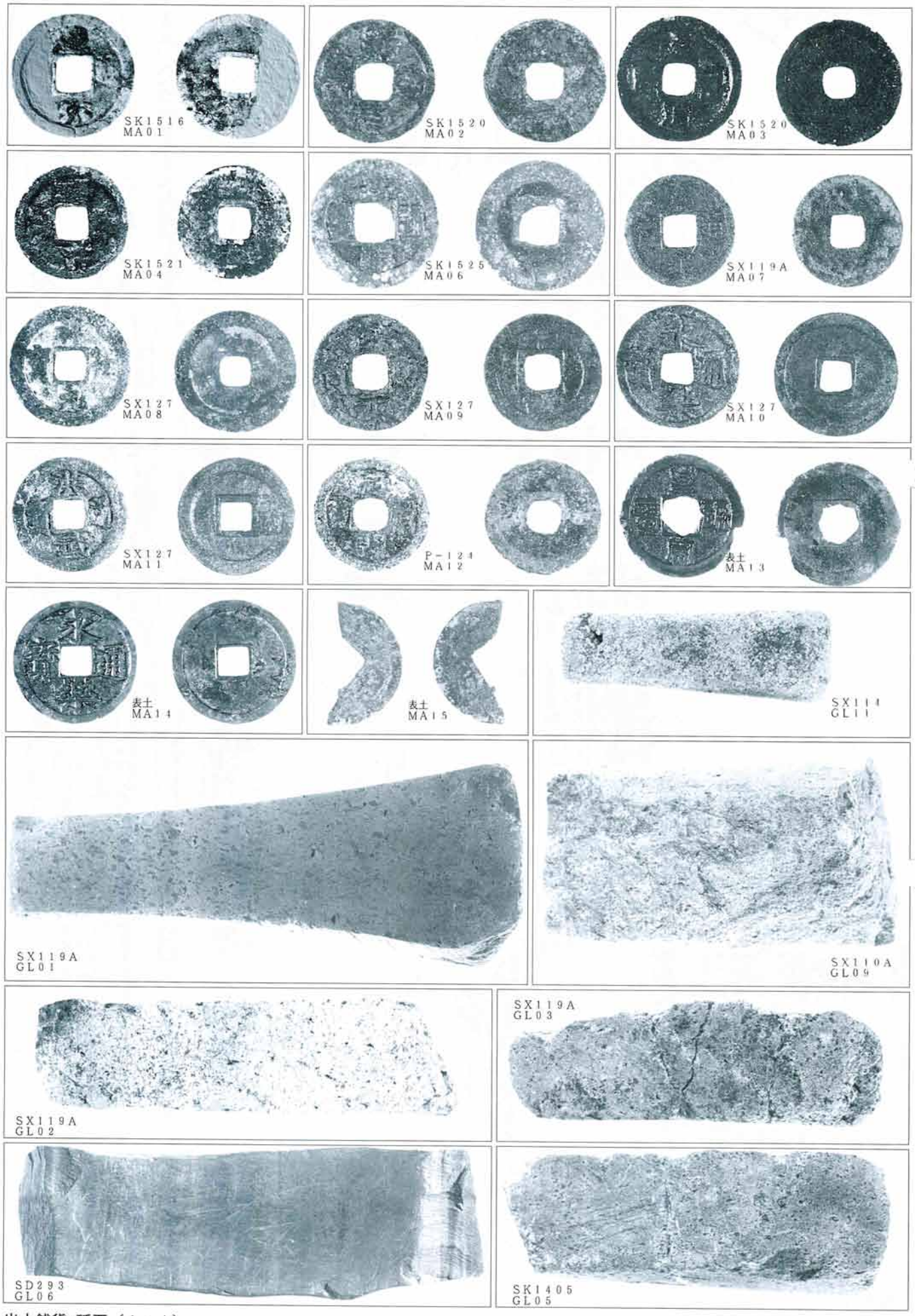

表土
KD338


表土
KH19

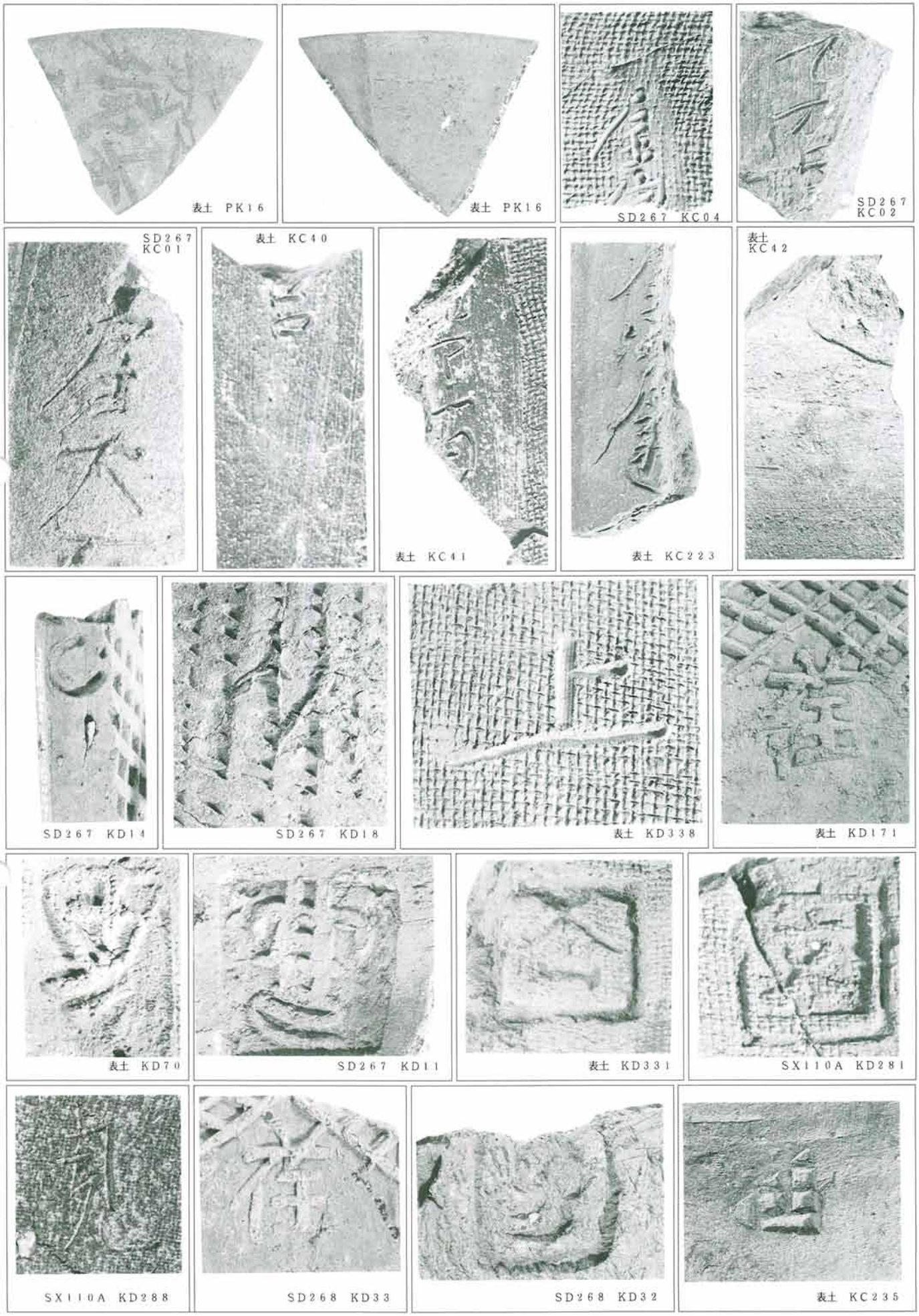

表土
KH20

出土女瓦・塼（1：4）

図版１０



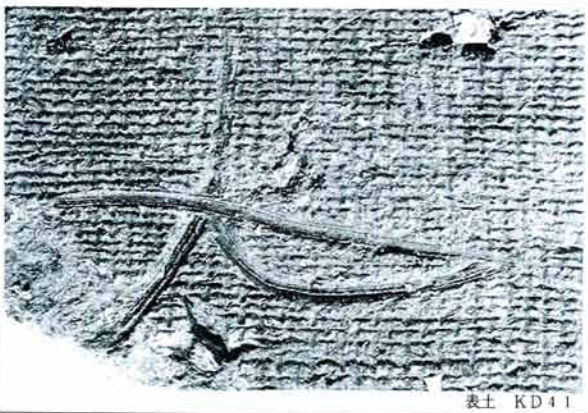
出土銭貨・砥石（１：１）



出土文字資料集成（1）（１：１）

図版１２

表土　KD40


表土　KD41

表土　KD68

表土　KD69

表土　KD43

表土　KD44

表土　KD147

表土　KD45

表土　KH20

表土　KD42

表土　KD74

出土文字資料集成（2）（１：１）

国分寺市文化財調査報告　第43集

武蔵国分尼寺跡Ⅲ
（むさしこくぶんにじあと）

平成6年度発掘調査概報

発行日　平成8年3月22日
編著者　国分寺市遺跡調査団
©（団長　吉田　格）
発行所　東京都国分寺市教育委員会
〒185 国分寺市戸倉1-6-1
TEL　0423-25-0111㈹
印刷所　望洋印刷株式会社

令和３年（2021）９月８日　デジタル版作成

表紙　出土文字瓦拓